isen chou omonawa

鹿児島県大島郡伊仙町面縄

Omo nawa site

面縄貝塚群Ⅱ

－面縄小学校改築に伴う面縄第２貝塚の緊急調査－

２０１４年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

isen chou omonawa

鹿児島県大島郡伊仙町面縄

Omo nawa site

面縄貝塚群Ⅱ

－面縄小学校改築に伴う面縄第２貝塚の緊急調査－

２０１４年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

序　文

奄美群島で最初に発掘調査が行われた面縄貝塚群は、学史的に著名であるばかりでなく、琉球列島の先史時代の暮らしや文化を理解するうえで欠かすことのできない遺跡です。本遺跡に関する報文や論文は数多くありますが、このたび、伊仙町教育委員会では面縄小学校の改築に伴う面縄第２貝塚の発掘調査報告書を刊行することとなりました。約２か月におよぶ発掘調査の結果、集石遺構や住居跡と見られる竪穴遺構が発見され、面縄小学校校庭の地下に重要な遺跡が残されていることが明らかにされました。

諸般の事情により調査から報告書の刊行までおおよそ10年の歳月を経ましたが、記録保存の成果を世に問うことによって遺跡の重要性を広く普及し、教育行政組織としての責を果たす所存であります。

最後になりましたが、発掘調査に関する詳細な記録を残していただいた皆さまと発掘作業に従事された方々に感謝の意を記し、序文と代えさせていただきます。

平成２６年３月
伊仙町教育委員会
教育長　茂岡　勲

例　言

1．本書は、伊仙町教育委員会が、平成11年度から12年度にかけて行った、面縄小学校改築に伴う面縄第２貝塚の確認調査と緊急発掘調査の調査報告である。
2．遺跡は、鹿児島県大島郡伊仙町大字面縄字西兼久に所在する。
3．発掘調査は、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導のもと、伊仙町教育委員会が主体となって行った。
4．発掘調査に際し、鹿児島大学法文学部、琉球大学法文学部の多大な支援を得た。記して感謝申し上げる。
5．発掘調査および報告書作成の経費は伊仙町教育委員会が負担した。
6．本書で用いたレベル高は海抜を表し、方位は磁北を示す。
7．本書の執筆は、次の通りである。

第Ⅰ～Ⅳ章	新里亮人
第Ⅴ章	小畑弘己、株式会社古環境研究所、黒住耐二 竹中正巳、樋泉岳二、真邉　彩
第Ⅵ章	新里亮人

8．検出遺構の実測図は１/30と１/50の縮尺で示した。
9．出土遺物の実測図は１/３と１/２の縮尺で示した。
10．参考、引用文献は章末に記した。ただし、第Ⅴ章に関してはこの限りではない。
11．出土遺物の写真撮影は、新里亮人が行った。
12．本書の編集は新里亮人が行った。
13．発掘調査における各種記録資料および出土品は、伊仙町歴史民俗資料館にて保管する。
14．出土遺物等は伊仙町歴史民俗資料館にて公開、活用を図る。

目　次

本文目次
序文
例言
第Ⅰ章．調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　2．調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　3．発掘作業（確認調査）の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　4．発掘作業（緊急調査）の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　5．整理等作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第Ⅱ章．遺跡周辺の自然的環境と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・9
　1．自然的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　3．面縄貝塚群の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第Ⅲ章．確認調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　1．調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　2．基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　3．出土遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　4．遺跡の範囲と今後の取り扱い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第Ⅳ章．緊急調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　1．調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　2．基本層序と遺構の検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　3．出土遺物の分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　4．検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第Ⅴ章．自然科学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　1．面縄第２貝塚 2002 年調査で採集された脊椎動物遺体の概要・・・・・・・51
　2．面縄第２貝塚の貝類遺体（予察）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　3．面縄第２貝塚出土の人骨加工品（概報）・・・・・・・・・・・・・・・・59
　4．面縄第２・４・１貝塚出土土器の圧痕調査報告・・・・・・・・・・・・60
　5．面縄第２貝塚出土試料の放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・66
　6．面縄第２貝塚における樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
　7．面縄第２貝塚における種実同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第Ⅵ章．総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
　1．面縄第２貝塚の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
　2．面縄小学校改築に伴う 2001 年度確認調査、2002 年度緊急調査の成果・・・77
　3．出土遺物の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
　4．自然科学的分析の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
　5．遺跡の残存状況と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
報告書抄録

挿図目次

図１　徳之島の遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・ 13
図２　面縄貝塚群の位置・・・・・・・・・・・・・・ 16
図３　面縄第１貝塚出土の石棺墓・・・・・・・・・・ 17
図４　確認調査トレンチ配置図・・・・・・・・・・・ 23
図５　１、２トレンチ土層柱状図・・・・・・・・・・ 24
図６　１トレンチＶ層検出の集石遺構・・・・・・・・ 24
図７　確認調査出土遺物（１）・・・・・・・・・・・ 25
図８　確認調査出土遺物（２）・・・・・・・・・・・ 27
図９　緊急調査の範囲および検出遺構の配置図・・・ 32
図１０　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
図１１　ＳＫ－０１実測図・・・・・・・・・・・・・ 35
図１２　ＳＫ－０１出土遺物・・・・・・・・・・・・ 35
図１３　ＳＫ－０２実測図・・・・・・・・・・・・・ 36
図１４　ＳＫ－０２出土遺物・・・・・・・・・・・・ 36
図１５　ＳＫ－０３実測図・・・・・・・・・・・・・ 37
図１６　ＳＫ－０３出土遺物・・・・・・・・・・・・ 38
図１７　ＳＫ－０４実測図・・・・・・・・・・・・・ 39
図１８　ＳＫ－０４出土遺物・・・・・・・・・・・・ 39
図１９　ＳＫ－０５実測図・・・・・・・・・・・・・ 40
図２０　ＳＫ－０５出土遺物・・・・・・・・・・・・ 40
図２１　ＳＫ－０６実測図・・・・・・・・・・・・・ 41
図２２　ＳＫ－０６出土遺物・・・・・・・・・・・・ 41
図２３　ＳＫ－０７実測図・・・・・・・・・・・・・ 41
図２４　ＳＫ－０７出土遺物・・・・・・・・・・・・ 41
図２５　ＳＫ－０８実測図・・・・・・・・・・・・・ 42
図２６　ＳＫ－０８出土遺物・・・・・・・・・・・・ 43
図２７　ＳＫ－０９実測図・・・・・・・・・・・・・ 44
図２８　ＳＫ－１０・ＳＫ－１１実測図・・・・・・・ 44
図２９　ＳＫ－１１出土遺物・・・・・・・・・・・・ 44
図３０　ＳＫ－１２実測図・・・・・・・・・・・・・ 45
図３１　ＳＫ－１３実測図・・・・・・・・・・・・・ 45
図３２　面縄第２貝塚出土の人骨加工品・・・・・・・ 59
図３３　面縄貝塚土器圧痕・レプリカＳＥＭ画像１・・ 63
図３４　面縄貝塚土器圧痕・レプリカＳＥＭ画像２・・ 64
図３５　面縄第２貝塚の炭化材・・・・・・・・・・・ 70
図３６　面縄第２貝塚の種実・・・・・・・・・・・・ 74
図３７　各層検出の遺構の配置・・・・・・・・・・・ 77

表目次

表１　徳之島の遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・ 14
表２　確認調査出土土器観察表・・・・・・・・・・・ 25
表３　確認調査出土貝製品観察表・・・・・・・・・・ 26
表４　確認調査出土骨製品観察表・・・・・・・・・・ 26
表５　緊急調査検出遺構観察表・・・・・・・・・・・ 46
表６　緊急調査出土土器観察表・・・・・・・・・・・ 46
表７　緊急調査出土貝製品観察表・・・・・・・・・・ 47
表８　緊急調査出土骨製品観察表・・・・・・・・・・ 47
表９　緊急調査出土石器観察表・・・・・・・・・・・ 47
表１０　面縄第２貝塚 2002 年度調査において遺構から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP，暫定結果）・・・・・・・・・ 51
表１１　面縄第２貝塚 2002 年度調査において包含層から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の概要・・・・・・・・・・・・・・・ 52
表１２　面縄第２貝塚 2002 年度調査の水洗選別資料から検出された脊椎動物遺体の組成（NISP）・ 52
表１３　面縄第２貝塚出土貝類遺体の詳細組成・・・・ 56
表１４　面縄第２・４・１貝塚検出圧痕一覧表・・・・ 61
表１５　面縄第２貝塚における樹種同定結果・・・・・ 71
表１６　面縄第２貝塚における種実同定結果・・・・・ 72
表１７　面縄第２貝塚 2002 年度調査での土器出土状況 78

図版目次

図版１　１．作業風景（１）
　　２．作業風景（２）
　　３．遺構面の精査
　　４．遺構検出作業
　　５．遺構の実測
　　６．調査区の測量
　　７．遺物出土状況（１）
　　８．遺物出土状況（２）
図版２　１．ａ面断面
　　２．ｂ面断面
　　３．ｃ面断面
　　４．ＳＫ－０１近景（南西より）
　　５．ＳＫ－０２近景（西より）
　　６．ＳＫ－０３近景（西より）
　　７．ＳＫ－０４近景（南より）
　　８．ＳＫ－０５近景（西より）
図版３　１．ＳＫ－０６近景（北西より）
　　２．ＳＫ－０７近景（北より）
　　３．ＳＫ－０８近景（南東より）
　　４．ＳＫ－０９近景（東より）
　　５．ＳＫ－１０・１１近景（北東より）
　　６．ＳＫ－１２近景（北より）
　　７．ＳＫ－１３近景（東より）
　　８．ピット群近景（南より）
図版４　１．確認調査１トレンチ出土遺物
　　２．確認調査６トレンチ出土遺物
　　３．ＳＫ－０１、ＳＫ－０６、ＳＫ－０７、ＳＫ－１１出土遺物
　　４．ＳＫ－０２出土遺物
　　５．ＳＫ－０３出土遺物
　　６．ＳＫ－０４出土遺物
　　７．ＳＫ－０５出土遺物
　　８．ＳＫ－０８出土遺物

第Ⅰ章
調査の経過

第Ⅰ章．調査の経過

1．調査に至る経緯

伊仙町教育委員会は、町内における埋蔵文化財の保存と活用のため、開発関係諸機関に対して、土木工事の事前に工区内の埋蔵文化財の有無を周知し、それらの取り扱いについて協議、調整を図っている。

平成13年度、町内に所在する面縄小学校の校舎改築が伊仙町教育委員会によって計画され、工区付近に包蔵される面縄第2貝塚の取扱いに関する協議が行われた。協議の結果、当該遺跡の範囲と内容の詳細を把握するための確認調査を実施し、遺構、遺物の有無によっては工事事前に開発に伴う緊急調査を実施することとなった。

これを受けた伊仙町教育委員会社会教育課は、平成14年度1月7日から18日に当事業区内の確認調査を実施し、その結果、未攪乱の包含層を数枚確認した。確認調査の成果に基づき、伊仙町教育委員会は平成14年11月から12月まで工事計画区域内の発掘調査を行ない、調査終了後、工区を事業部局へと移管した。発掘調査は鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導の下、伊仙町教育委員会社会教育課が担当した。

2．調査の組織

（1）確認調査（平成13年度）

調査主体者	伊仙町教育委員会			
調査責任者	〃		教育長	徳岡誠二郎
調査事務担当	〃	社会教育課	課　長	時　　孝
調査庶務担当	〃	〃	課長補佐	政野　宗六
確認調査担当	〃	社会教育課	主幹兼係長	四本　延宏
	〃	〃	文化係長	伊藤　勝徳
	〃	〃	社会教育指導員	元田　智章
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課		埋蔵文化財係長	新東　晃一
	鹿児島県立埋蔵文化財センター		第3調査係係長	牛ノ浜　修

（2）緊急調査（平成14年度）

調査主体者	伊仙町教育委員会			
調査責任者	〃		教育長	吉見　　健
調査企画担当	〃	総務課	課　長	重村　宏明
調査事務担当	〃	〃	係　長	田島　輝久
発掘調査担当	〃	社会教育課	主幹兼係長	四本　延宏
	〃	〃	文化係長	伊藤　勝徳
発掘調査指導	鹿児島県立埋蔵文化財センター		第3調査係係長	牛ノ浜　修
	〃		第1調査文化財係主事	堂込　秀人
発掘作業員	安座間充、池田豊光、池田秀光、		今村結記、上原　武、大倉　優、	

加覧淳一、幸山隆晴、作　俊徳、沢村安俊、関口精三、主悦英徳、
中村友昭、中村祐一、西　弘明、福田　聡、福元治久、中山安麿、
野崎拓司、三好栄太郎、赤塚典子、池上洋子、稲富美子、大倉節子、
勝野智子、金城貴子、小谷真貴子、関　キヨ、関　ハル、徳川はつ子、
徳川まつえ、友良よしえ、仲　幸恵、中　美子、仲西美奈子、中元美子、
前地初子、森　はる子、琉　涼子

（3）報告書作成（平成 15、16 年度、平成 21 ～ 25 年度）

事業主体者	伊仙町教育委員会		
事業責任者	〃	教育長	吉見　健（平成 18 年 1 月まで）
			時任　武雄（平成 22 年 2 月まで）
			亀山喜一郎（平成 23 年 10 月まで）
			茂岡　勲（平成 23 年 10 月から）
事業事務担当	〃	社会教育課　課　長	時　孝（平成 16 年 3 月 31 日まで）
			幸多　健策（平成 22 年 3 月 31 日まで）
	〃		當　吉郎（平成 22 年 4 月 1 日から）
	〃	〃	主幹兼係長　四本　延宏（平成 16 年 3 月 31 日まで）
報告書作成担当		〃	文化係長　伊藤　勝徳（平成 16 年 3 月 31 日まで）
		〃	学芸員　新里　亮人（平成 16 年 4 月 1 日から）

遺物整理指導

鹿児島県文化財課	主事	中村　和美
鹿児島県文化財課	主事	馬籠　亮道
鹿児島県立埋蔵文化財センター	課長	堂込　秀人
鹿児島女子短期大学	教授	竹中　正巳
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター	助教	新里　貴之
国学院大学	助教	伊藤　慎二
札幌大学	教授	高宮　広土
早稲田大学	講師	樋泉　岳二
千葉県立博物館	上席研究員	黒住　耐二

遺物整理作業員　仲　幸恵、琉　涼子（平成 15 ～ 16 年度）
作田　恵、富　いずみ（平成 21 ～ 22 年度）
伊藤まさえ、田中　愛、永岡明奈、深川五月（平成 23 ～ 25 年度）

3．発掘作業（確認調査）の経過

1 月 7 日（月）～ 9 日（水）

機材搬入および調査区（2 m × 2 m）を 5 か所（1 ～ 5 トレンチ）に設定。重機による表土剥ぎを行ない、各トレンチの掘り下げを進める。1、2 トレンチから遺物および遺物包含層が確認された。小学校校庭東側宅地に新たな調査区（6 トレンチ）を設け、重機による表土剥ぎを行なう。

1月10日(木)～11日(金)
　6トレンチの掘り下げと遺物取り上げ作業を行なう。

1月14日(月)～18日(金)
　6トレンチの掘り下げと遺物取り上げ作業を行なう。

1月21日(月)～22日(火)
　6トレンチの埋戻しおよび発掘機材の撤収を行なう。

4．発掘作業(緊急調査)の経過

11月5日（火）～8日（金）
　プレハブの搬入、発掘作業員へのオリエンテーション。調査区（5m×5m）の設定、表土の除去、三角点よりレベル移動を行なう。鹿児島県立埋蔵文化財センター牛ノ濱氏調査指導のため来跡。

11月11日(月)～15日（金）
　各調査杭に標高を与える。A、B区の掘り下げと出土遺物の取り上げ、調査区壁面の清掃作業、A－3区、A－4区遺構検出状況および調査区南壁の写真撮影を行なう。天城町教育委員会社会教育課一行遺跡見学（13日）。名瀬市教育委員会高梨修氏来跡（14日）。14日午後、15日は町主催行事（カムィヤキ古窯跡群シンポジウム）のため作業中止。

11月18日(月)～23日(土)
　調査区を南側に1m拡張し、調査杭を打ちなおす。それに伴いグリッド名を変更する。調査区前面を精査する。調査区北側の遺物取り上げ。調査区西側攪乱範囲の平面図作成。調査区内の杭打ちを行なう。廃土の篩かけ作業。調査区東側攪乱範囲の平面図作成。調査区北側の掘り下げ。調査区西側の遺物取り上げ。集石の写真撮影。面縄小学校生徒遺跡見学。調査区南側セクション図作成。調査区北側拡張区の掘り下げ。調査区西側攪乱箇所の掘り下げ。集石の見通し断面図の作成。
　北側拡張区の攪乱箇所の掘り下げ。調査区西側の白砂層掘り下げ。集石遺構の見通し断面図作成。北側拡張区の攪乱箇所掘り下げ。西側はⅣ層上面を検出。調査区西側Ⅳ層上面範囲の写真撮影。調査区東側堀込部分の掘り下げ。調査区東北端に先行トレンチ1、調査区西南端に先行トレンチ2を設定し、掘り下げを進める。調査区東側白砂層の掘り下げを行なう。

11月25日(月)～11月29日(金)
　調査区西側Ⅴ層の遺物取り上げ。調査区東側白砂層掘り下げ。先行トレンチ1、2の掘り下げ。調査区中央の攪乱部を掘り下げる。SK－01の掘り下げ。SK－01の検出状況、SK－02、SK－03の検出状況の写真撮影。調査区東側B－2、B－3区Ⅲ層(白砂層)の掘り下げ。SK－01の掘り下げ。北側拡張区D－7区、DE－7区攪乱箇所の掘り下げ。先行

トレンチ１、２の掘り下げ。ＳＫ－０３の平面図作成と遺物作成。午後、Ｄ－７区撹乱箇所掘り下げ。ＳＫ－０１半裁、ＳＫ－０２、ＳＫ－０３の掘り下げ。ＳＫ－０４、ＳＫ－０５、ＳＫ－０６の平面図作成と遺物取り上げ。調査区を南側へさらに３ｍ拡張する。北側拡張区Ｄ－６、Ｄ－７区の掘り下げ。ＳＫ－０１、ＳＫ－０２、ＳＫ－０３、ＳＫ－０５、ＳＫ－０６の半裁掘り下げ、Ｂ－２区、Ｂ－３区Ⅲ層遺物取り上げ。Ｂ－４区、Ｂ－５区の断面に集石を検出。Ｄ－５区、Ｄ－６区の掘り下げ、ＳＫ－０２の遺物取り上げＳＫ－０６の断面図作成。南側拡張区（Ａ－２、３、４区、Ｂ－２、３、４区）の掘り下げ。ＳＫ－０１範囲の平面、断面図作成。ＳＫ－０３の遺物出土状況平面図、ＳＫ－０５の半裁断面図の作成。ＳＫ－０６全掘。南側拡張区掘り下げ。ＳＫ－０７プラン検出。北側拡張区にて遺構検出。ＳＫ－０５遺物取り上げと全掘。ＳＫ－０６の平面図作成。ＳＫ－０３遺物出土状況平面図作成。ＳＫ－０５全掘と写真撮影。ＳＫ－０６完掘状況平面図作成。ＳＫ－０１全掘、西側拡張区の掘り下げ。Ｂ－５、Ｂ－６区ピット群平面図作成。ＳＫ－０１全掘、ＳＫ－０２断面図、Ａ－４、Ａ－５、Ａ－６区の掘り下げ。

12月２日（月）～12月６日（金）

ＳＫ－０３遺物取り上げ。ＳＫ－０５平面図、ＳＫ－０１半裁断面図の作成。南壁壁面清掃。ＳＫ－０３断面図、ＳＫ－０５完掘状況平面図の作成、ＳＫ－０１全掘、ＳＫ－０２完掘平面図の作成。ＳＫ－０３断面図作成と遺物取り上げ、Ｂ－４、Ｂ－５区ピット群半裁。Ｂ－１区撹乱層の掘り下げ。ＳＫ－０１全掘。ＳＫ－０３平面図、Ｂ－４、５区ピット群半裁、Ｂ－１、Ｂ－２区遺物取り上げ。ＳＫ－０３平面図の作成、北側拡張区遺構配置平面図、Ｂ－４、Ｂ－５区ピット半裁断面図の作成。ＳＫ－０３断面図の作成。ＳＫ－０２完掘と写真撮影、北側調査区ピット半裁、ＳＫ－０７精査。ＳＫ－０３掘り下げ、炉跡半裁平面図の作成、Ｂ－４、Ｂ－５区ピット群全掘、半裁時写真撮影、ＳＫ－０１写真、ＳＫ－０７写真撮影。ＳＫ－０３平面図、灰層断面図の作成、Ｂ－４、Ｂ－５区ピット群全掘、半裁時写真、ＳＫ－０１、ＳＫ－０７写真撮影。ＳＫ－０３平面図、灰層断面図の作成、Ｂ－４、Ｂ－５区ピット群全掘、北側拡張区ピット群全掘、ＳＫ－０１平面図作成。

12月９日（月）～12月14日（土）

南側拡張区敷石遺構精査、Ｂ－４、Ｂ－５区掘り下げ、ＳＫ－０３平面図、ＳＫ－０１平面図の作成、南側拡張区精査、遺構平面図作成、北側拡張区掘り下げ、南壁清掃。ＳＫ－０３完掘写真、ＳＫ－０４掘り下げと半裁、北側拡張区遺構範囲平面図、ＳＫ－０１平面図、Ｂ－４区土坑セクション図の作成、南側拡張区南壁精査、鹿浦小学校見学、ＳＫ－０１平面図、ＳＫ－０３最終平面図の作成、ＳＫ－０４、ＳＫ－０７の掘り下げ南壁セクション図の作成、Ｂ－２、３区掘り下げ。喜念小学校生徒見学。ＳＫ－０１平面図、南壁セクション図、Ｂ－５、Ｃ－５区掘り下げ、ＳＫ－０４、ＳＫ－０９掘り下げ。南側拡張区精査、南側トレンチ精査。ＳＫ－０１平面図、ＳＫ－０４掘り下げ、南トレンチ１、２掘り下げ、Ｂ－４、Ｂ－５区、Ｃ－４区Ⅳ層の掘り下げ、Ａ区撹乱範囲平面図の作成、面縄中学校２年生現場見学。Ｂ－６区撹乱層掘り下げ、ＳＫ－０８メッシュ張り。ＳＫ－０４平面図、南トレンチ１、２の掘り下げ、精査、写真撮影、Ｃ－４区ピット半裁、Ｂ－６区撹乱層とⅢ層の掘り下げ、ＳＫ－０８平面図、

ＳＫ－０１集石の取り上げ、ＳＫ－０４、ＳＫ－０８平面図、南トレンチ１、２攪乱、平面範囲、Ｂ－５区、Ｂ－６区、Ｃ－４区Ⅲ層掘り下げ。

12月16日(月)～12月22日(日)

ＳＫ－０１、ＳＫ－０４、ＳＫ－０８平面図作成。ＳＫ－０４遺物取り上げ。南トレンチ１、２攪乱部の掘り下げ。Ｃ－４区Ⅲ層掘り下げ。ＳＫ－０７、ＳＫ－０８平面図の作成。ＳＫ－０４掘り下げ、南トレンチ１、２の掘り下げと精査、Ａ－５区、Ａ－６区、Ｂ－５区、Ｂ－６区精査、写真撮影、攪乱部平面図の作成、Ａ－１区、Ａ－２区、Ｂ－１区、Ｂ－２区の掘り下げ、Ｃ－４区Ⅲ層掘り下げ。南壁セクション図作成。鹿児島県立埋蔵文化財センター牛ノ浜氏現地指導。ＳＫ－０１、ＳＫ－０４、ＳＫ－０７、ＳＫ－０８、ＳＫ－０９平面図作成、Ｂ－２区、Ｂ－３区、Ｃ－２区、Ｃ－３区Ⅲ層掘り下げ。Ａ－５区、Ａ－６区、Ｂ－５区、Ｂ－６区攪乱部掘り下げ、Ｂ－１区、Ｂ－２区、Ｃ－１区、Ｃ－２区Ⅲ層掘り下げ。ＳＫ－０７の集石取り上げ。Ａ－１区、Ｂ－１区Ⅴ層掘り下げ、Ｂ－６区掘り下げ。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７、ＳＫ－０８平面図、ＳＫ－０９の遺物取り上げ。Ｂ－４区、Ｃ－４区Ⅴ層上面平面図、Ｂ－２区、Ｂ－３区旧南壁セクション図作成。調査区東端にトレンチを設定。ＳＫ－１０掘り下げ、Ａ－２区、Ａ－３区、Ｂ－２区、Ｂ－３区攪乱範囲の平面図作成。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７、ＳＫ－０８平面図の作成。ＳＫ－０８東西トレンチの掘り下げ。ＳＫ－１１掘り下げ、Ｂ－５区、Ｂ－６区Ⅳ層掘り下げ。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７、ＳＫ－０８平面図、南トレンチ１、２平面図の作成、ＳＫ－０８東西トレンチの設定、調査区東壁写真撮影、調査区北壁トレンチの設定、Ａ－２区、Ｂ－２区Ⅲ層掘り下げ、Ｂ－４区、Ｂ－５区、Ｃ－４区、Ｃ－５区ピット半裁と全掘。ＳＫ－０９Ｍ１層掘り下げ、調査区東壁セクション図の作成、旧南壁沿いトレンチ設定、Ａ－１区、Ａ－２区、Ｂ－１区、Ｂ－２区Ⅲ層掘り下げ。

12月23日(月)～12月29日(日)

ＳＫ－０１、ＳＫ－０７平面図、集石の取り上げ。ＳＫ－０８東西トレンチ精査と写真撮影。午後旧南壁沿い東西トレンチ設定。ＳＫ－１２検出、記録後に現地保存することとなった。ＳＫ－０１、０７平面図、集石の取り上げ、ＳＫ－０８検出面集積取り上げ。南壁沿いＡ－２、Ａ－３区トレンチの掘り下げ、ＳＫ－０９掘り下げ、ＳＫ－０８トレンチ南壁セクション図の作成、Ａ－２、Ａ－３、Ｂ－２、Ｂ－３区Ⅲ層掘り下げ、Ａ－２、Ａ－３区南壁沿いトレンチ掘り下げ。旧南壁トレンチ壁面、ＳＫ－１２検出状況、ＳＫ－０７平面、Ｂ－４、Ｃ－４区Ⅴ層上面、ＳＫ－１０、ＳＫ－１１完掘の写真撮影。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７平面図、集石取り上げ、ＳＫ－０８掘り下げ、南壁トレンチ掘り下げ、ＳＫ－０８トレンチ南壁セクション図の作成、Ａ－３区Ⅲ層掘り下げ、南トレンチ１Ⅳ層掘り下げ。Ａ－１、Ａ－２、Ｂ－１、Ｂ－２区掘り下げ。南トレンチ１土器底部出土状況、ＳＫ－０７セクション写真撮影。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７平面図、断面図の作成、集石取り上げ、ＳＫ－０８の精査と写真撮影、ＳＫ－１３検出、Ａ－１、Ａ－２、Ｂ－１、Ｂ－２区掘り下げ、調査区北壁セクション図、Ｂ－５区Ⅳ層掘り下げ、南トレンチ１掘り下げ(ＳＫ－０８上面)、ＳＫ－０８平面プラン検出面範囲、調査区トレンチ配置図作成。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７断面図、ＳＫ－０８平面プラン検出面集積取り上げ、Ａ－３、Ｂ－３区Ⅵ層掘り下げ、Ｂ－２、Ｃ－２区Ⅶ層掘り下げ、南トレンチ１掘

り下げ、Ｂ－５区東壁セクション図、調査区内トレンチ配置図、南壁Ａ－１、Ａ－２、Ａ－３区セクション図、調査区西壁精査。ＳＫ－０１断面図、ＳＫ－０７平面図集石取り上げ、ＳＫ－０８の精査と写真撮影、Ｂ－３区西壁セクション図、ＳＫ－０１、ＳＫ－０７平面図集石取り上げ、ＳＫ－０８ピット配置図、ＳＫ－１２平面図作成。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７平面図の作成、集石取り上げ、ＳＫ－０８ピット半裁、全掘、断面図作成、Ｂ－４区Ⅲ層(白砂層)掘り下げ、ＳＫ－１２エレベーション。

12月30日(月)～12月31日(火)

ＳＫ－０１、ＳＫ－０７平面図、断面図、南壁セクション図の作成、Ａ－３、Ａ－４、Ｂ－３、Ｂ－４区Ⅳ層掘り下げ、西壁の精査、写真撮影、セクション図作成。ＳＫ－０８の炭化物サンプル採取、ＳＫ－０１レベリング、集石取り上げ、ＳＫ－１３レベリング。調査終了。

５．整理等作業の経過

平成15～16年度　出土遺物の洗浄、注記、年代測定、樹種同定
平成23年度　　自然遺物の洗浄と整理
平成24年度　　自然遺物の集計、人工遺物の復元および図化、出土品の写真撮影
平成25年度　　自然科学的分析、挿図作成、出土品の写真撮影、報告書作成

第Ⅱ章
遺跡周辺の自然的環境と歴史的環境

第Ⅱ章．遺跡周辺の自然的環境と歴史的環境

1．自然的環境

日本列島の南側、九州島から台湾に点在する島嶼群は琉球列島と呼ばれる。亜熱帯性気候に属し、一年を通して温暖な地域と言える。琉球列島は地理的なまとまりから大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島に分けられるが、トカラ列島以南の島々にはサンゴ礁が形成され、それに由来する琉球石灰岩の地形が認められる。

奄美諸島に含まれる徳之島は、奄美大島と沖永良部島の間に位置する島周約 84km、面積約 248㎢の島で、その外形は、北に狭く南が広がる徳利形を呈する。島の中央部には北側から天城岳 (533 m)、井之川岳 (645m)、犬田布岳 (417 m) が南北方向にそびえており、島を東西に両断する。地形は標高 200 m を境に山地と段丘に区分され、地形上の特徴からは高島に分類される。こうした山地を取り巻くように、隆起珊瑚礁の海岸段丘が形成され、沿岸には断崖や砂丘が認められる。哺乳類では、アマミノクロウサギ、ケナガネズミ、アマミトゲネズミ、リュウキュウイノシシ、ジャコウネズミ、ワタスジネズミ、ハツカネズミ、クマネズミ、コキクガシラコウモリ、アブラコウモリなどが生息している。植物相としては、ハツシマカンアオイ、トクノシマカンアオイ、アマミアラカシ、オキナワウラジロガシなどがあり、動植物ともに固有種、準固有種が多く認められることが特筆される。

徳之島の行政区は、北西側の天城町、北東側の徳之島町、南側の伊仙町の３つの町からなり、人口は約 27000 人を数える。島の南側に位置する伊仙町は、奄美諸島の中で最も広い耕地面積を有した、農業を主産業とした町である。北西部の犬田布岳から南西部に向かうと標高 200 m 以下の台地が広がり、海岸部は海食崖が屹立する。これに対して、南部から南東部にかけては海岸部へ緩やかに延びる海岸段丘と裾礁が認められ、西側の喜念、佐弁、面縄には砂丘が形成される。河川は東側から本川、面縄川、鹿浦川、阿権川、上成川などがあり、深い侵食谷の谷底を流れている。これらは、伊仙町北部の馬根、中山方面からそれぞれの台地を放射状に分断しながら海へと至る。

島内には中生代と想定される尾母層 (粘板岩、凝灰岩互層、蝉緑岩)、秋利神川層 (砂岩、粘板岩互層)、手々層 (砂岩)、与名間層 (砂岩、礫質砂岩、チャート)、更新世の琉球層群である糸木名層 (石灰岩、砂岩、礫岩、シルト岩、リグナイト)、木之香層 (石灰岩、砂岩、礫岩)、亀津層 (石灰岩、砂岩、礫岩、シルト岩) と現世の石灰岩、砂、礫、粘土が分布する。伊仙町内で最も標高が高い犬田布岳周辺は最も古い尾母層群で構成され、これを取り囲むように花崗岩帯や琉球層群が認められる。こうした地層の差異は山地と段丘の違いと対応しており、地形上の特徴は地質的な特性と密接に関連していることが分かる。

自然植生の調査によると、山地帯にリュウキュウアオキ - スダジイ群団が残り、隆起珊瑚礁石灰岩地帯にはリュウキュウガキ - ナガミボチョウジ群団が確認される。海岸にはモンパノキ - クサトベラ群集が発達し、砂丘にはツキイゲ群落、グンバイヒルガオ群落、ハマゴウ群落が繁茂する。隆起珊瑚礁、裾礁の岩上にはテンノウメ、ハリツルマサキ、モクビャッコウ、ミズガンピなど珊瑚石灰岩地に卓越する植生が認められる。確認される植物相も地質の分布と対応しており、多様な地質環境の上に特徴的な自然環境が成立していることが知れる。

2．歴史的環境（図１、表１）

徳之島で現在確認されている遺跡の総数は約 130 遺跡ある。そのうちの約半数は伊仙町で発見されており、島内の中でも最も遺跡が密集している地域と言える（図２）。

町内で最古の遺跡は旧石器時代に遡ると考えられている。伊仙町木之香の天城遺跡ではチャート製の剥片（堂込・栗林 1994）、伊仙町小島のガラ竿遺跡ではＡＴ火山灰層の下層から磨石２点が発見された（四本・伊藤 2002）。これらことから徳之島における人類の活動は約 25000 年前頃に至る可能性が高まってきており、今後良好な状態での出土事例が期待される。チャート片は天城町カマントゥ遺跡、伊仙町佐弁遺跡、宮戸原遺跡などからも採集されており、徳之島は琉球列島の中でも旧石器時代の遺跡が密集する地域として注目されている。

縄文時代から古代並行期（沖縄貝塚時代前期～後期と対応）の遺跡は台地、洞穴、岩陰、砂丘上に立地している。

代表的な遺跡として喜念貝塚（三宅 1940）、面縄貝塚群（山崎 1930、牛ノ浜・堂込編 1985）、犬田布貝塚（吉永・宮田 1984）などが挙げられる。こうした遺跡から発見された土器はそれぞれ喜念式、面縄前庭式、面縄東洞式、面縄西洞式、犬田布式と命名されており、琉球列島における土器編年の基礎となっている。

また、墓の検出例も比較的多く、喜念原始墓（三宅 1943）、喜念クバンシャ遺跡（立神、長野編 1988）、佐弁トマチン遺跡（新里編 2013）、面縄第１貝塚（牛ノ浜・堂込編 1985）からは人骨が発見された。墓の種類も岩陰墓、石棺墓、積み石墓などがあり、その構造は多様である。面縄第３貝塚で発見された土器は兼久式土器（河口 1974）と呼ばれており、古代並行期の奄美諸島を代表する土器として知られる。兼久式土器は中国唐代の開元通宝、本土産の須恵器や土師器、鉄器類、イモガイ製貝符、多量のヤコウガイを伴うことが多い（高梨編 2003、2005、2007、中山編 2006、若杉・尾上編 1996）。

中世並行期（沖縄のグスク時代と対応）には、琉球列島一円で穀物生産が始まっていたことが明らかとなっている。伊仙町目手久の川嶺辻遺跡では、13 世紀から 17 世紀の水田面からイネ、ムギ、アワが検出された（新里編 2010a）。こうした生活跡からは、在地産の土器に加え九州、中国、朝鮮半島の食器類や鉄器類が出土することが多い。

また、居館と伝えられる遺跡も少なからず存在し、上面縄に所在する恩納城跡（通称：ウガンウスジ）は、その規模が最も大きい。工事中に、完形の青磁碗 12 点が不時発見されたほか（亀井 1993）、近年の調査では、石積み、掘立柱建物跡、方形竪穴、溝状遺構などが確認されており、城館の存在を想定させるにふさわしい調査成果が得られている。

さらに注目すべき遺跡としては、琉球列島唯一の中世窯業跡である徳之島カムィヤキ陶器窯跡（新東・青崎 1985a、b、青崎・伊藤 2001、池田編 2005、新里 2005）が挙げられる。当遺跡で生産された陶質の土器（類須恵器、カムィヤキと呼ばれる）は琉球列島一円で使用されており、琉球列島における食器生産と流通を知る上で欠かすことのできない遺跡である。窯跡の大部分は伊仙町阿三、伊仙、検福にまたがる国有林内に所在しており、窯跡の分布から大きく７つのグループに分けられている。窯跡の灰原から得られた炭化物の放射性炭素年代によって 11 世紀から 13 世紀の創業年代が与えられている。

伊仙町面縄の海岸にはカムィヤキや中国産の青磁が散布しており、付近の海底からも食器類

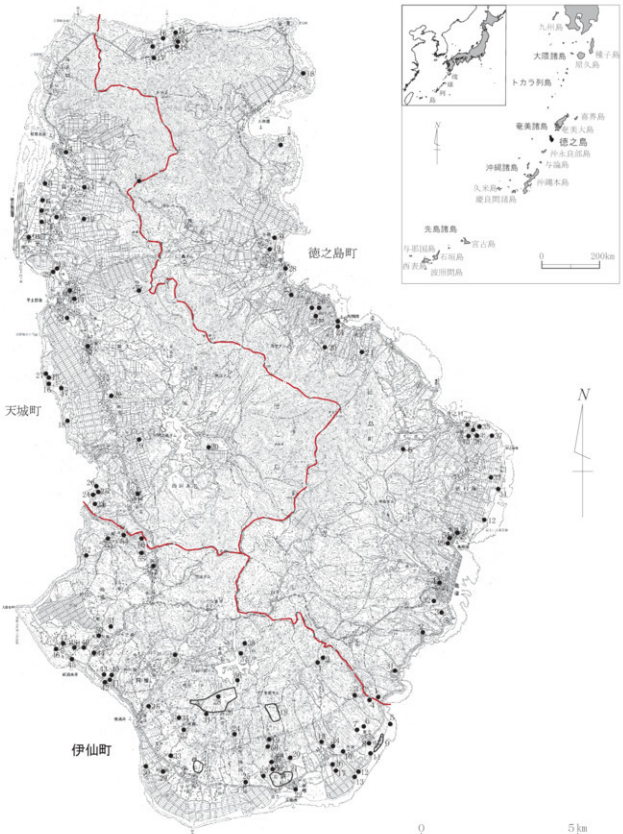

徳之島町
天城町
伊仙町
N
0
5km
九州島
大隅諸島
種子島
屋久島
トカラ列島
奄美諸島
喜界島
奄美大島
徳之島
沖永良部島
与論島
沖縄諸島
沖縄本島
久米島
慶良間諸島
先島諸島
宮古島
与那国島
石垣島
西表島
竹富島
0
200km

図１　徳之島の遺跡分布

表１　徳之島の遺跡一覧

町名	番号	遺跡名	所在地	時代
徳之島町	1	木川	亀津木川7041	縄文
	2	奥名川	奥名川白貞6283	縄文
	3	亀津南	亀津塔原4597	縄文
	4	美代願山	亀津3357	縄文
	5	坂元	亀徳2087	縄文
	6	ナーデントウ	諸田中代ナギタ	縄文
	7	神之嶺石アナダ	神之嶺アナダ146他	縄文
	8	大当	母間反川8040	縄文
	9	城畠	上花徳1740	縄文
	10	畦	畦1434-63	縄文
	11	手々	手々3203	縄文
	12	ヨン兼久貝塚	亀徳	
	13	神之嶺城跡	神之嶺アギマス	中世
	14	神田１・２	手々字神田	縄文
	15	山田	手々字山田	縄文
	16	大配田	手々字大配田	
	17	カンゲサク	手々字カンゲサク	
	18	下汐飛屋	山字下汐飛屋	縄文
	19	ハンタ	花徳坪久	
	20	田志喜志	母間字田志喜志	歴史
	21	宮城・中和原	母間字宮城・中和原	
	22	トヒャラ下川貝塚	神之嶺字トヒャラ下川	
	23	石京當原	母間字石京當原	縄文
	24	下田	母間字下田	縄文、弥生
	25	溜り水	母間字溜り水	歴史
	26	上ヤチクル	母間	
	27	中長迫	母間字中長迫	歴史
	28	宮城山	花徳宮城	中世
	29	殿地跡	亀徳里	中世
	30	カンジャエ	亀徳カンジャエ	歴史
	31	朝良	南原	中世
	32	永久	亀津	縄文
	33	イチミ	諸田	縄文
	34	アミバテ	徳和瀬	縄文、弥生
	35	アナダB	神之嶺	古墳～中世
	36	八之嶺	神之嶺	縄文
	37	高浜	諸田	縄文
	38	ヤト城跡	手々	中世
天城町	1	大城跡	松原字大城山	中世
	2	大和城跡	天城字当山	中世
	3	玉城跡	天城字真瀬名	中世
	4	アガリン竿	松原字アガリン竿	歴史
	5	馬塔	岡前字馬塔	縄文、弥生
	6	尾志理田	岡前字川津辺	
	7	オカゼン	岡前	
	8	戸ノ木	岡前字戸ノ木	弥生
	9	塩浜	岡前字塩浜	
	10	オガミヤマ	岡前字オガミヤマ	歴史
	11	中尾宮塔	岡前字中尾宮塔	歴史
	12	鬼入塔	浅間字鬼入塔	歴史
	13	大久保	天城字大久保	縄文、歴史
	14	平土野原	平土野字平土野原	縄文
	15	塔原	兼久字塔原	縄文～弥生、中世
	16	鍋窪	兼久字鍋窪	縄文
	17	千間	大津川字千間	縄文
	18	長竿	瀬滝字長竿	歴史
	19	秋利神線刻画	瀬滝字中山	
	20	三京線刻画	西阿木名	
	21	西阿木名	西阿木名	歴史
	22	瀬滝	大津川	歴史
	23	下原１	西阿木名	縄文
	24	下原２	西阿木名	縄文
	25	下原３	西阿木名	歴史
	26	下原４	西阿木名	縄文
	27	加万塔	兼久字加万塔	近世～近代
	28	中里	天城字中里	縄文、中世
	29	キジ	天城字喜治	
	30	中組	兼久	

町名	番号	遺跡名	所在地	時代
	1	喜念按司屋敷跡	喜念上泉袋	中世
	2	喜念上原	喜念上泉袋	弥生（後）
	3	ヲネガン	喜念スーバテ	中世
	4	本川	喜念	弥生（前）
	5	喜念原始墓	喜念ムデナウ	弥生
	6	ウシロマタ	喜念ワカバトウ	縄文～中世
	7	ウエアタリ	喜念ワキンダリ	縄文～中世
	8	喜念貝塚	喜念兼久	縄文（後）～弥生（後）
	9	喜念浜砂丘	喜念	
	10	サクダ	佐弁サクダ	古代～中世
	11	佐弁貝塚	佐弁東ミヤド	弥生（後）
	12	佐弁（第二）	佐弁ミヤド	
	13	佐弁トマチン	佐弁トマチン	縄文～弥生
	14	川嶺辻	目手久川嶺辻、川嶺下	古代～中世
	15	中筋川トゥール墓跡	目手久中筋川	近世～近代
	16	大久保	目手久字大久保	
	17	上水源	目手久上水タマリ	
	18	恩納城跡	面縄ウガン	中世
	19	面縄按司墓	上面縄	中世
	20	ミツク	面縄	古墳～中世
	21	**面縄貝塚群**	**面縄西兼久**	**縄文～中世**
	22	東浜貝塚	東面縄	弥生（後）
	23	ヲクラチ	面縄ヲクラチ	縄文～中世
	24	トラグスク	検福古里	中世
	25	赤久	検福赤久	縄文
	26	徳之島カムィヤキ陶器窯跡	検福（矢田、打田）、阿三（亀田、亀焼、柳田）、伊仙（東柳田、平ソコ）	中世
	27	ミンツヤキ集落跡	伊仙ミンツヤキ	中世
	28	平スク	伊仙平スク	縄文
	29	下板割	伊仙下板割	弥生
伊仙町	30	瀬田海	伊仙	弥生
	31	ヨヲヤキ洞穴	阿三ヨヲヤキ	縄文（中）～中世
	32	カン田	阿三カン田	縄文～中世
	33	前田	阿三前田	縄文～中世
	34	あざま按司城跡	阿三字谷俣	中世
	35	勘花	西阿三字勘花	中世
	36	ウウビラ城跡	馬根	中世
	37	墓地（ねーま遺留）	中山	近世～近代
	38	中山神社	中山	中世
	39	フードグスク	阿権大当原	中世
	40	木之香	木之香	縄文～弥生
	41	天城	木之香	旧石器、縄文（晩）、古墳
	42	アマングスク	木之香島権	中世
	43	下島権	木之香島権	縄文（晩）～中世
	44	カメコ	犬田布カメコ	縄文（晩）
	45	前浜西貝塚	西犬田布	弥生
	46	宮戸原	犬田布宮戸原	中世
	47	犬田布記念碑	犬田布	弥生
	48	犬田布貝塚	犬田布連木竿1152番地	縄文～弥生
	49	アジフー	犬田布	弥生～中世
	50	アジフーB	犬田布	中世
	51	妙巌按司城跡	犬田布明眼	中世
	52	宮里原	上晴宮里原	縄文～中世
	53	後竿	小島後竿	中世
	54	大成川	小島大成川	
	55	ガラ竿	小島ガラ竿	旧石器～中世
	56	上成川	糸木名上成川	縄文
	57	河地	糸木名字河地	縄文～中世
	58	廣力	面縄廣力	中世
	59	大セノ嶺	面縄大セノ嶺	中世
	60	中ノ当	面縄中ノ当	中世

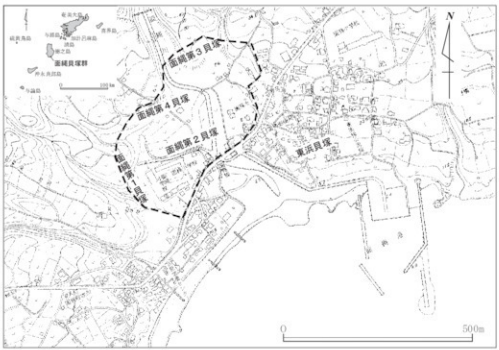


図２　面縄貝塚群の位置

が採集されている（南西諸島水中文化遺産研究会・鹿児島大学法文学部物質文化論研究室編 2013）。当該期の物資運搬と関わる遺跡は、伊仙町南部の沿岸に残されている可能性がある。

近世（江戸時代）に対応する遺跡としては島内各地に所在するトゥール墓がある。トゥール墓とは山の斜面、崖、岩陰などを利用した葬所のことを指し、その所在調査も進められている（義 1993）。近年農業基盤整備事業の一環で発掘調査が行なわれ（新里編 2010b）、薩摩、琉球産の陶器甕に頭骨が納められ、肥前の磁器が副葬された状況が記録されている。その他近代の遺跡としては、大戦時の防空壕跡や塹壕跡がある。

３．面縄貝塚群の概要（図２）

面縄貝塚群とは、伊仙町面縄の面縄小学校周辺に位置する縄文時代前期から古代並行期に至る遺跡である。昭和５年広瀬祐良によって発見され、その調査成果が山崎五十麿によって報告された（山崎 1930）。

その後、小原一夫、河口貞徳、国分直一らによって新たな遺跡が発見され（小原 1932、河口 1956、国分他 1959）、面縄港に接する砂丘地帯に先史時代の遺跡群が点在する様子が明らかにされた。近年では、伊仙町教育委員会の確認調査によって、遺跡の正確な範囲が把握されつつある。

（１）面縄第１貝塚

第１貝塚は面縄小学校の西側に位置する石灰岩洞穴内、石灰岩丘陵のテラス面および崖下に立地する。遺跡は切り立った石灰岩丘陵に囲まれた空間内にあり、付近は樹木が覆い茂る日中でも薄暗い特別な環境にある。谷底の岩陰にはトゥール墓と呼ばれる墓地が残されており、現

在でも薩摩焼や壺屋焼に収められた人骨を目にすることができる。

1930年における最初の発掘調査では、石灰岩丘陵中のテラス面に堆積する貝層の発掘調査が行なわれ、多数の遺物が得られている(山崎1930)。その後の調査では貝層中から土器、貝製品、開元通宝が発見された(小原1932)。

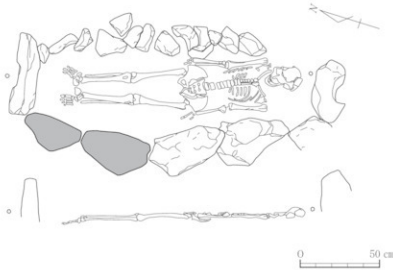


図３　面縄第１貝塚出土の石棺墓

1983年の調査では(牛ノ浜・堂込編1985)、テラス面にあたるＡ－０区より純貝層が確認されており、ⅠからⅢ層から兼久式土器、貝製品、開元通宝が出土している。最下層の上部より面縄前庭式土器が検出された。

Ａトレンチ（テラス面）の上層(Ⅰ～Ⅲ層)から陶器や青磁片が検出されており、純貝層であるⅣ層からは兼久式土器や貝製品が出土している。

洞穴内からは、縄文時代晩期から弥生時代前期並行期の箱式石棺墓が検出されている。石棺は複数の石灰岩塊を配して箱状の棺を作り、両小口には扁平な石灰岩が使用された仕様のもので、棺に納められた壮年女性の埋葬姿勢は仰臥伸展葬であった。

谷地部分のＣ－０、１区には近世の風葬骨の下位に兼久式期の貝層が堆積し、最下層となるⅢ層から貝製品と人骨が検出された。

谷地部分のＣ－５区では、Ⅴ層より市来式土器とオオツタノハ製貝輪が出土している。最下層のⅥ層には人骨が散乱している状況が確認され、爪形文土器が検出された。

谷地部分Ｄ－１区のⅣ層からは山ノ口式土器、谷地部分Ｄ－６区の調査ではⅣ層より型式不明の土器が２、３点出土している。

(２) 面縄第２貝塚

本遺跡は面縄港に面する標高８メートルの砂丘上、現在の面縄小学校の校庭内と学校東側の宅地に立地する。1932年小原一夫によって発見され(小原1932)、その出土土器に関する所見が公表されている(大山・小原1933)。

本土復帰後は九学会連合による調査を経て(国分他1959)、伊仙町教育委員会による遺跡の範囲内容確認調査(1983、2008、2011年)と面縄小学校改築に伴う緊急発掘調査(2002年)が行なわれている。

1983年の確認調査では学校敷地東側の空き地の発掘調査によって、石灰岩礫の集石が発見され住居跡の可能性があると報告されている。

2002年における面縄小学校改築に伴う緊急調査では、炉跡とみられる集石、住居跡、ピッ

ト群が発見された。遺物は嘉徳式土器を主体とし、多量の貝製品、骨製品、自然遺物が得られている。

（3）面縄第3貝塚

面縄海岸の北側400メートルの隆起珊瑚礁の斜面に立地する。この石灰岩台地の縁辺には3つの岩陰が開口しているが、岩陰内および隣接地から貝層が発見されている。本遺跡は、1955年の九学会連合による調査の際、河口貞徳によって発見された。発見当初、所在地の地名をとって兼久貝塚と呼ばれていたが、後に面縄第3貝塚に改められ、後に古代並行期の奄美諸島を代表する兼久式土器の標識遺跡となった。

1983年における岩陰内の確認調査では（牛ノ浜・堂込編1985）、それぞれの洞穴に兼久式土器の小片が散布している状況が確認され、第3洞穴において兼久式土器期の土層下位より人骨が検出されている。同年のAトレンチ確認調査では、兼久式期の混土貝層（Ⅳ層）と面縄前庭式を包含する土層（Ⅵ層）が確認された。その他、石器や貝製品が出土している。

（4）面縄第4貝塚

面縄小学校の北側の畑地内に位置する。九学会による調査の際、2箇所の岩陰（西洞穴、東洞穴）およびその前面の畑地（前庭部）において包含層が確認され、石灰岩台地の崖下に遺跡が立地することが明らかとされた。

1954年における九学会の面縄第2貝塚の調査時に発見され、1956年に発掘調査が行なわれた（国分他1959）。この調査によって宇宿下層式と設定されていた土器が、面縄東洞式、面縄西洞式、面縄前庭式に細分され、それらの標識遺跡として知られるようになった。その後1983年と2007年に伊仙町教育委員会による確認調査が行なわれている。

1983年東洞穴の調査では（牛ノ浜・堂込編1985）、ⅢからⅥ層から土器（室川下層式、条痕文土器、春日式、面縄前庭式、仲泊式、面縄東洞式）、石器（石斧、凹み石、石皿）、貝製品（貝錘、スイジガイ製利器、螺蓋製貝斧）、骨製品（骨針）が出土した。

同年の西洞穴の調査では、ⅢからⅦ層において土器（室川下層式、面縄前庭式、面縄東洞式、嘉徳式、松山式系統、宇宿上層式、兼久式）、石器（石斧、磨石、凹石、敲石、石皿）、貝製品（貝匙、螺蓋製貝斧）が発見されている。

参考文献

青崎和憲・伊藤勝徳(編)　2001『カムィヤキ古窯支群Ⅲ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)　伊仙町教育委員会

池田榮史（編）　2005「南島出土須恵器の出自と分布に関する研究」平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)・(2)　研究成果報告書　琉球大学法文学部

牛ノ浜修・堂込秀人(編)　1983『面縄第1．第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財調査報告書(1)　伊仙町教育委員会

牛ノ浜修・堂込秀人(編)　1985『面縄貝塚群』伊仙町埋蔵文化財調査報告書(4)　伊仙町教育委員会

大山柏・小原一男　1933『奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物(第1回)＝面縄第二貝塚＝伊波式土器の研究』『史前学雑誌』5巻5号

小原一男　1932「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」『史前学雑誌』4巻3・4号

鹿児島県立博物館　1996『奄美の自然』　鹿児島の自然調査事業報告書Ⅲ

亀井明徳　1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11　11～45頁　上智大学アジア文化研究所

河口貞徳　1956「南島先史時代」『鹿児島大学南方産業科学研究所報告』1-3

河口貞徳　1974「奄美諸島における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9　鹿児島県考古学会

義　憲和　1993『徳之島の墓地(古代・中世・近世)』

国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義麿・原口正三　1959『奄美大島の先史時代」『奄美－自然と文化　論文編』九学会連合奄美大島共同調査委員会

新東晃一・青崎和憲(編)　1985a『カムィヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　伊仙町教育委員会

新東晃一・青崎和憲(編)　1985b『カムィヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　伊仙町教育委員会

新里亮人(編)　2005『カムィヤキ古窯跡群Ⅳ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)　伊仙町教育委員会

新里亮人(編)　2010 a『川嶺辻遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)　伊仙町教育委員会

新里亮人(編)　2010 b『中筋川トゥール墓跡』　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)　伊仙町教育委員会

新里貴之(編)　2013『徳之島トマチン遺跡の研究』鹿児島大学

高梨　修(編)　2003『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書四　名瀬市教育委員会

高梨　修(編)　2005『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』名瀬市文化財叢書七　名瀬市教育委員会

高梨　修(編)　2007『奄美大島奄美市小湊フワガネク遺跡群Ⅱ』奄美市文化財叢書一　奄美市教育委員会

立神次郎・長野真一(編)　1988『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓』　伊仙町埋蔵文化財調査報告書(7)　伊仙町教育委員会

堂込秀人・栗林文夫(編)　1994『天城遺跡・下島権遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)　伊仙町教育委員会

中山清美(編)　1995『用見崎遺跡』　笠利町文化財調査報告書第28号　笠利町教育委員会

中山清美(編)　2006『マツノト遺跡』　笠利町文化財調査報告書第28号　笠利町教育委員会

南西諸島水中文化遺産研究会・鹿児島大学法文学部物質文化論研究室　2013『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進　海の文化遺産総合調査報告書－南西諸島編－』　特定非営利法人アジア水中考古

学研究所
三宅宗悦　1940「南島の先史時代」『人類学先史学講座』第16巻
三宅宗悦　1943「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯について」『考古学雑誌』20 - 10
吉永正史・宮田栄二(編)　1984『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　伊仙町教育委員会
四本延宏・伊藤勝徳 2002「徳之島・伊仙町小島ガラ竿遺跡の確認調査～ＡＴ火山灰下層の出土石器について～」『南島考古だより』69　沖縄考古学会
山崎五十麿　1930「鹿児島縣大島郡徳之島面縄貝塚に就いて」『考古学雑誌』20巻10号　考古学会
若杉竜太・尾上博一(編)　1996「用見崎遺跡Ⅲ」『研究室活動報告』32　熊本大学文学部考古学研究室

第Ⅲ章
確認調査の成果

第Ⅲ章．確認調査の成果

1．調査の方法（図４）

確認調査では遺構および包含層の包蔵状態を把握するため、面縄小学校校庭内の５箇所に２ｍ×２ｍの調査区を設定し、重機を用いた表土剥ぎと人力による掘り下げを行なった。東側から順にトレンチ番号(１～５トレンチ)を付し、さらに校庭東側の民家敷地内に４ｍ×８ｍの調査区を設定し、６トレンチと命名した(図４)。発掘調査の結果、小学校校庭内の１、２トレンチに遺物包含層が確認され、さらに校庭外の６トレンチにも良好な状態の遺物包含層が検出

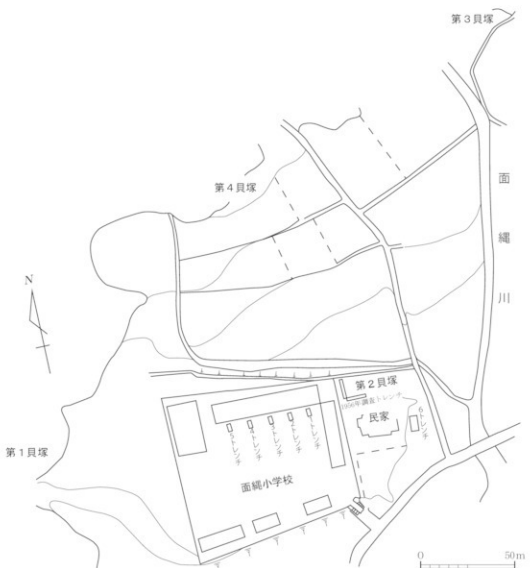


図４　確認調査トレンチ配置図

された。このことから、昭和10年に発見された面縄第2貝塚が面縄小学校校庭内にも延びており、面縄小学校が立地する砂丘の東半には良好な状態で遺跡が包蔵されていることが明らかとなった。

2．基本層序（図5）

遺物包含層が確認された1、2、6トレンチの基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：表土層である。層厚約40cmであった。

Ⅱ層：遺物を包含しない白色砂層である。層厚約20cmであった。

Ⅲ層：遺物を包含する黒褐色砂層である。層厚約40cmであった。

Ⅳ層：遺物を包含しない淡褐色砂層である。層厚約40cmであった。

Ⅴ層：遺物を包含する黒褐色砂層である。層厚約60cmであった。1トレンチからは集石遺構が検出された。

図5　1、2トレンチ土層柱状図

3．出土遺構と遺物（図6～8、表2～4）

（1）1トレンチ検出の遺構と出土遺物1トレンチには間層を挟んで2枚の包含層が確認され、土器、貝製品、魚類、貝類等が検出された。最下層からは珊瑚石を用いた集石遺構が発見された。出土遺物は土器（1～5）、パイプウニに孔を穿った有孔製品（6）、獣形の貝製品（7）およびヤコウガイの蓋を用いた敲打具（8）などがあった。

（2）6トレンチ出土遺物

遺跡東側の包蔵状態の確認のため設定した本調査区は、良好な状態で包含層が確認された。1983年に一部発見されていた住居跡の全面検出にも努めたが、時間的制約のため確認には至らなかった。遺物は土器（1～34）、猪牙製品(35、36)、貝製品(37～40)等が出土した。

4．遺跡の範囲と今後の取り扱い

確認調査の結果、面縄小学校校庭内の調査区（1、2トレンチ）で確認された包含層は、砂層の堆積状

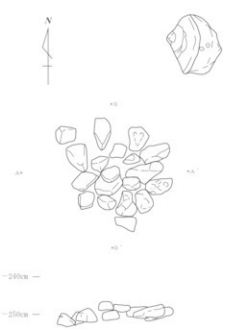


図6　1トレンチⅤ層検出の集石遺構
※標高は任意の眼高からの読み値

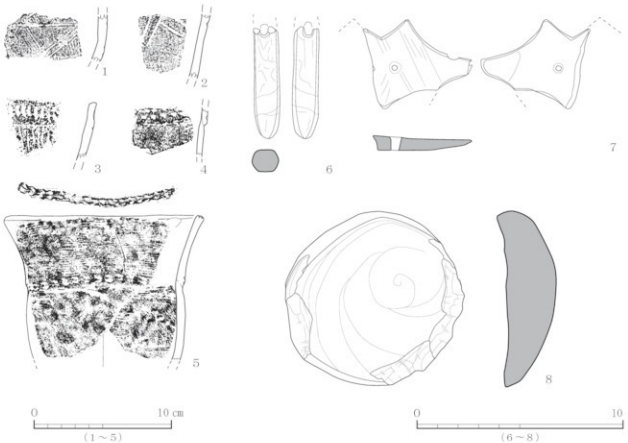


図7　確認調査出土遺物（1）

表2　確認調査出土土器観察表

図	番号	分類	位置	層位	胎土	混和材	内面調整	外面調整	文様	焼成	備考
7	1	Ⅲ群－B	1トレンチ	Ⅱ層	良好	砂粒	条痕調整	ナデ	沈線文	良好	
7	2	Ⅲ群－B	1トレンチ	Ⅱ層	良好	砂粒	条痕調整	ナデ	沈線文	良好	
7	3	Ⅲ群－B	1トレンチ	Ⅴ層	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	刺突文、沈線文	良好	
7	4	Ⅱ群－B－1	1トレンチ	Ⅴ層	やや粗い	チャート、雲母	ナデ	ナデ	刺突文	良好	
7	5	Ⅱ群－B－1	1トレンチ	Ⅴ層	良好	砂粒、チャート	条痕調整	条痕調整	刺突文	良好	
8	1	Ⅰ群	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	石英？、雲母	ナデ	指押さえ、ナデ	無し	良好	
8	2	Ⅰ群	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	雲母	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	無し	良好	
8	3	Ⅰ群	6トレンチ	Ⅱ層	粗い	石英、チャート、砂粒	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	無し	良好	
8	4	Ⅰ群	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、チャート	ナデ	ナデ	無し	良好	
8	5	Ⅰ群	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	無し	良好	
8	6	Ⅰ群	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、雲母	指押さえ、ナデ	条痕調整	無し	良好	
8	7	Ⅱ群－A－2－②	6トレンチ	Ⅱ層	粗い	砂粒	ナデ	ナデ	押し引き様、沈線文	やや良好	
8	8	Ⅱ群－A－3－①	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	砂粒	指押さえ、ナデ	ナデ	刺突文	良好	
8	9	Ⅱ群－A－2－②	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	押し引き様、沈線文	良好	
8	10	Ⅱ群－A－2－②	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、チャート	ナデ	ナデ	押し引き様、沈線文	良好	
8	11	Ⅱ群－A－2－②	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	砂粒	ナデ	ナデ	刺突文、沈線文	良好	
8	12	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、石英、チャート	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	13	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、石英	条痕調整	ナデ	沈線文	良好	
8	14	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒	指押さえ、ナデ	ナデ	沈線文	良好	

図	番号	分類	位置	層位	胎土	混和材	内面調整	外面調整	文様	焼成	備考
8	15	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	砂粒、チャート	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	16	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、雲母、石英、チャート	指押さえ、ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	17	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	チャート、雲母	指押さえ、ナデ、条痕調整	ナデ	沈線文	良好	
8	18	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、雲母	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	19	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	20	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	チャート、砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	21	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒	ナデ、条痕調整	ナデ	沈線文	良好	
8	22	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、チャート	条痕調整	ナデ	沈線文	良好	
8	23	Ⅱ群－B－1	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	チャート、石英、砂粒	ナデ	ナデ	刺突文	良好	
8	24	Ⅲ群－B	6トレンチ	Ⅱ層	良好	砂粒	ナデ	ナデ	刺突文、沈線文	良好	
8	25	Ⅲ群－B	6トレンチ	Ⅱ層	良好	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	26	Ⅲ群－B	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒、石英	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	27	Ⅱ群－A－4－①	6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好	
8	28	Ⅱ群－B－5	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	砂粒、チャート、雲母	ナデ	ナデ	刺突文	良好	
8	29	Ⅱ群－B－5	6トレンチ	Ⅱ層	緻密	砂粒、石英、チャート	ナデ	ナデ	刺突文	良好	
8	30	Ⅱ群－C－1	6トレンチ	Ⅱ層	粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文、刺突文	良好	
8	31		6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	チャート、石英	ナデ	指押さえ		良好	底径8.8cm
8	32		6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	雲母、チャート	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ		良好	底径9.6cm
8	33		6トレンチ	Ⅱ層	やや粗い	チャート、石英	ナデ	ナデ		良好	底径9.0cm
8	34		6トレンチ	Ⅱ層	緻密	雲母	ナデ	ナデ		良好	底径10.0cm

表3　確認調査出土貝製品観察表

図	番号	貝種	位置	層位	成形	調整	残存長(cm)	残存幅(cm)	重量(g)	備考
7	6	パイプウニ	1トレンチ	Ⅴ層			5.4	1.3	7.0	穿孔あり
7	7	シャコガイ？	1トレンチ	Ⅴ層	打割	研磨	4.5	4.8	19.0	穿孔あり
7	8	ヤコウガイ	1トレンチ	Ⅴ層			8.4	9.5	215.0	殻打痕
8	37	ヤコウガイ	6トレンチ	Ⅱ層			7.8	8.2	171.0	殻打痕
8	38	ヤコウガイ	6トレンチ	Ⅱ層	不明	研磨	5.5	4.1	14.0	穿孔あり
8	39	オオツタノハ	6トレンチ	Ⅱ層	打割	研磨	4.7	5.8	7.0	
8	40	シレナシジミ	6トレンチ	Ⅱ層	打割	研磨	7.0	5.7	15.0	

表4　確認調査出土骨製品観察表

図	番号	種別	位置	層位	成形	調整	長辺(cm)	短辺(cm)	重量(g)	備考
8	35	猪牙	6トレンチ	Ⅱ層	不明	研磨	4.6	1.2	4.0	抉りあり
8	36	猪牙	6トレンチ	Ⅱ層	不明	研磨	6.6	1.5	6.0	穿孔あり

況からも過去に発見されていた面縄第２貝塚の一部であることが予想される。山形口縁、平底を特徴とする出土土器は、過去における調査でも検出されており(国分他 1959)、出土遺物の様相もこれを支持する。出土土器は、器形、文様等の特徴から、縄文時代後期並行期に位置付けられている嘉徳Ⅰ式A、同Ⅰ式B、同Ⅱ式に該当すると考えられる(河口 1974)。

校庭内の調査区における包含層の堆積状況から、小学校校舎建設予定地にも遺跡が広がって

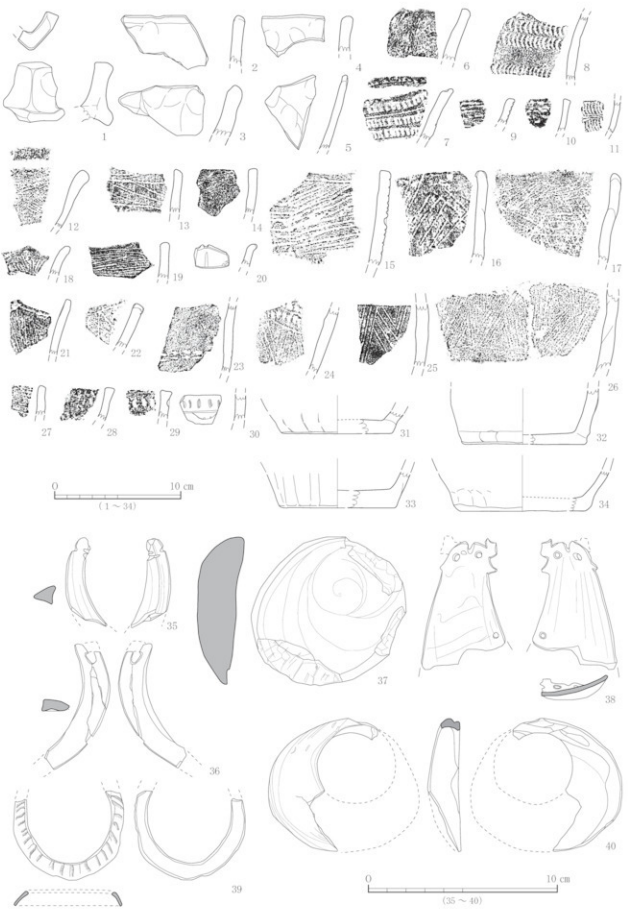


図8　確認調査出土遺物（2）

いる可能性が非常に高いことが予想される。この結果を受けた伊仙町教育委員会、鹿児島県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターは本遺跡の取り扱いについて協議を行ない、平成14年度に開発の事前に緊急調査を実施することとなった。

参考文献

河口貞徳　1974「奄美諸島における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9　鹿児島県考古学会

国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義麿・原口正三　1959「奄美大島の先史時代」『奄美－自然と文化　論文編』九学会連合奄美大島共同調査委員会

第Ⅳ章
緊急調査の成果

第Ⅳ章．緊急調査の成果

１．調査の方法（図９）

確認調査の結果、本遺跡には複数の遺構面が包蔵されている可能性が想定されたため、緊急調査では重機による表土剥ぎの後、人力による掘り下げを行ない、遺構面の精査によって砂層に掘り込まれた遺構の検出に努めることとした。表土直下からは、小学校校舎建築に伴う攪乱箇所が多く確認されたため、攪乱坑の掘り下げを優先的に行い、その断面観察によって砂層の堆積状況を確認しながら調査を進めた。

発掘調査の結果、素掘りの竪穴状遺構、ピット群、集石遺構等が検出されたが、遺構に伴う遺物の平面位置と高さの記録を並行しながら遺構の実測と遺構配置図を作成した（図９）。年代測定分析を実施する目的で遺構に伴う炭化物は極力回収し、また微細遺物の検出のため遺構埋土の大半を篩に掛けた。

２．基本層序と遺構の検出状況（図10）

調査区内で確認された層は、表土層であるⅠ層を除いてすべて砂層であり、色調、砂質、包含遺物によって以下の７層に分層される。調査区各断面の確認から、Ⅱ層以下の砂層は、調査区の北側から南側（海側）に向かって下降しながら傾斜堆積する状況が確認された。このことから、本遺跡が立地する砂丘は、Ｃ、Ｄグリッドの東西ラインを頂点に、Ａ、ＢグリッドおよびＤ、Ｅグリッドの南北方向に向かって落ち込んだ旧地形を呈していたと推定される。

なお、検出された遺構の名称は、すべての頭文字をＳＫに統一し、発見順にアラビア数字の番号を付している。

Ⅰ層：表土、客土層である。コンクリート塊、礫、砂利等を多く含む。

Ⅱ層：暗褐色砂層（Hue10YR ３／４）である。遺物包含層。しまりはやや弱く、カタツムリ殻を多く含む。

Ⅲ層：黄白砂層（Hue10YR ６／４）である。遺物包含層。Ⅱ層よりはしまりが強く、カタツムリ殻を僅かに含む。ＳＫ－０１、ＳＫ－０７、ＳＫ－０８、ＳＫ－０９、ピット群は本層上面で確認された。本層中からは、レンズ状に堆積する褐色砂層が局所的に確認されたが、平面で捉えることができなかったため、本報告では分層は控えている。堆積箇所と所見は記録をおさえているが、今後の調査では注意が必要である。

Ⅳ層：黒褐色砂層（Hue10YR ４／４）である。遺物包含層。砂粒は荒く、しまりは弱い。貝殻片やカタツムリ殻を含む。ＳＫ－０２、ＳＫ－０５、ＳＫ－０６、ＳＫ－１３は本層中で確認された。

Ⅴ層：黄白砂層（Hue10YR ６／４）である。遺物包含層。砂粒は粗く、しまりは強い。ＳＫ－１０、ＳＫ－１１は本層中より確認される。

Ⅵ層：黒褐色砂層（Hue10YR ４／４）である。遺物包含層。砂粒は荒く、しまりは弱い。ＳＫ－０３、ＳＫ－０４、ＳＫ－１２は本層中より検出された。

Ⅶ層：白砂層（Hue10YR ７／４）である。遺物包含層。調査区東側においてのみ確認されている。調査区内からは遺構は検出されなかった。

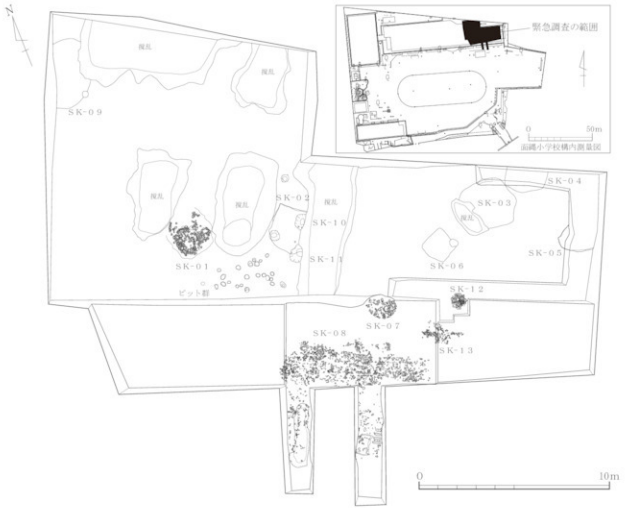


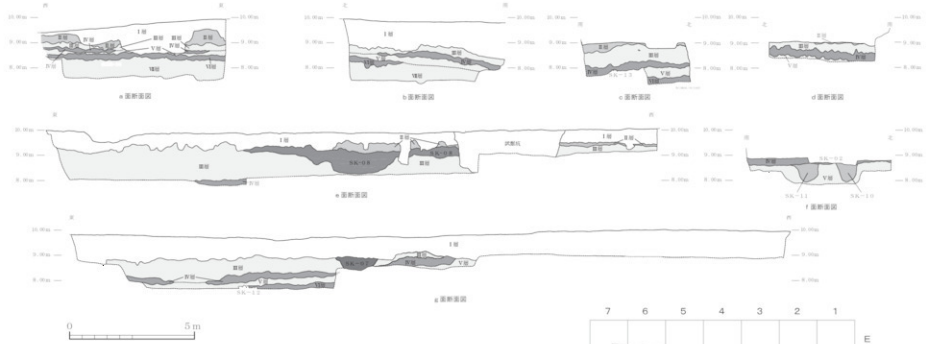
図９　緊急調査の範囲および検出遺構の配置図

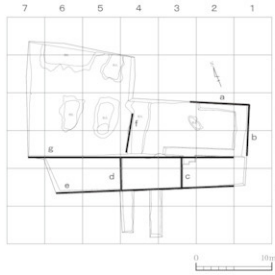
３．出土遺物の分類

人工遺物は土器、石器、貝製品、骨製品などが出土している。全形がうかがえる土器は数少なく、器形の差異は抽出し難かったが、主に文様の違いによって３群に分類される。以下では主として土器の分類について記し、貝製品、骨製品については、種別ごとに適宜報告する。なお、出土遺物の分類と所見については、章末の出土遺物観察表にまとめて示した。

（１）出土土器の概要

今回の調査で出土した土器の特徴は以下の通りである。やや粗い胎土が用いられるものの、全体的に良質で、混和材として砂粒、石灰岩、チャート、石英、雲母を含んでいる。焼成は比較的良く、仕上がりは、薄手のものが比較的多い。器種は山形口縁、山形突起、平口縁を有する深鉢形が大半を占め、僅かに壺がある。口縁部は肥厚によって縁帯が設けられるものが一定量あり、底部は全て平底である。口唇部に刻み目を有する土器が非常に多い。口縁部の文様は、押し引き文様、刺突文、沈線文およびそれらを融合させたものがある。胴部にも沈線文を施すものが一定量含まれる。無文土器は非常に少ない。調整はナデ、指押さえを主体に、刷毛目状調整も認められる。





I層：表土、客土層。コンクリート塊、礫、砂利等を多く含む。

II層：暗褐色砂層（Hue10YR３/４）。遺物包含層。しまりはやや弱く、カタツムリ殻を多く含む。

III層：黄白砂層（Hue10YR６/４）。遺物包含層。II層よりはしまりが強く、カタツムリ殻を僅かに含む。

IV層：黒褐色砂層（Hue10YR４/４）。遺物包含層。砂粒は荒く、しまりは弱い。貝殻片やカタツムリ殻を含む。

V層：黄白砂層（Hue10YR６/４）。遺物包含層。砂粒は粗く、しまりは強い。

VI層：黒褐色砂層（Hue10YR４/４）。遺物包含層。砂粒は荒く、しまりは弱い。

VII層：白砂層（Hue10YR７/４）。遺物包含層。砂粒は荒く、固くしまる。

図１０　土層断面図

（2）出土土器の分類

これらの土器は、文様の有無と施文部位によって大きく３群に分けられる。特に、有文のものは、口縁部を第１文様帯、胴部を第２文様帯とし、施文部位の構成によってさらに細分した。

第Ⅰ群

第Ⅰ群は口縁部、胴部に文様が施されないもので、器種は深鉢と壺がある。深鉢は、山形口縁と平口縁があるが、施文方法によって以下の２類に細分する。

１：口縁部無文

２：口唇部に刻み目あり

第Ⅱ群

第Ⅱ群は第１文様帯にのみ文様が施される土器で、器種は深鉢と壺がで、深鉢は山形口縁と平口縁がある。これらは第１文様帯の区画方法によって大きく３類(Ａ～Ｃ)に分けられ、文様構成によってさらに細分できる。

Ａ類は、施文による文様帯の区画が行なわれないものである。深鉢は、口縁部を肥厚させ、縁帯によって区画を表現するもの、縁帯を設けないものの両者がある。

１：押し引き文が施される。口縁の断面形は二等辺三角形状を呈し、縁帯の幅は狭い。

①押し引き文のみ

②押し引き文と沈線文で構成される

２：押し引き様の刺突文を主体とするもの。幅広の縁帯を設けるもの、縁帯を設けないもの両者がある。

①押し引き様の刺突文のみ

②押し引き様の刺突文と沈線文で構成される

３：刺突文を主体とするもの。幅広の縁帯を設けるもの、縁帯を設けないもの両者がある。

①刺突文のみ

②刺突文と沈線文で構成される

４：沈線文を主体とするもの。幅広の縁帯を設けるもの、縁帯を設けないもの両者がある。

①沈線文のみ

②沈線文と刺突文で構成される

Ｂ類は、第１文様帯が刺突文によって区画されるものである。深鉢は、口縁部を薄めに肥厚させ、幅広の縁帯を設けるもの、縁帯を設けないものの両者がある。

１：刺突による区画文の上位は無文

２：刺突による区画文の上位に沈線文が施される

３：刺突による区画文の上位に刺突文が施される

４：刺突による区画文の上位に沈線文と刺突文が施される

５：刺突文が口縁帯の上下端に施されるもの

６：刺突文が口縁帯の上下端に施され、その中に沈線文が充填されるもの

Ｃ類は、第１文様帯の肥厚口縁帯が沈線文によって区画されるものである。深鉢は、口縁部を薄めに肥厚させ、幅広の縁帯を設けるもの、縁帯を設けないものの両者がある。

１：刺突文を主体とするもの

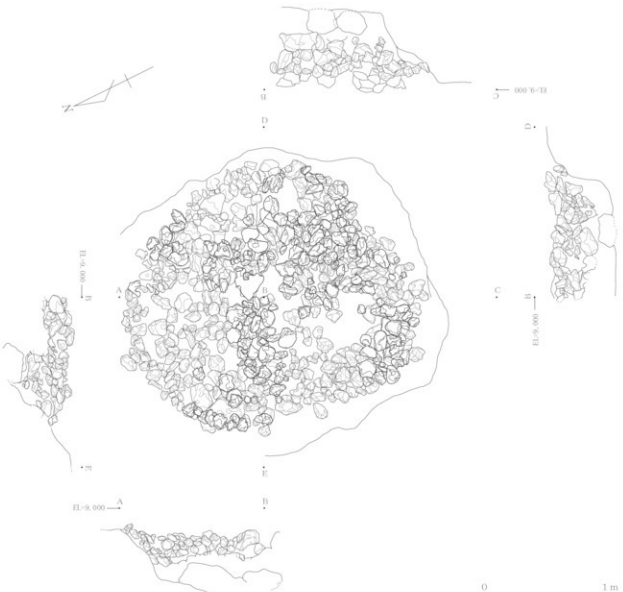


図11　SK－01実測図

2：沈線文を主体とするもの

第Ⅲ群

第Ⅲ群は、第1文様帯に第2文様帯に施文がおよぶ土器で、器種は深鉢がある。第2文様帯には、沈線による第1文様帯の区画方法によりA、Bの2類に分けられる。口縁部を肥厚させて幅広の縁帯を設けるものと縁帯を設けないものの両者がある。

A類：刺突文により第1文様帯を区画するもの

B類：沈線文により第1文様帯を区画するもの

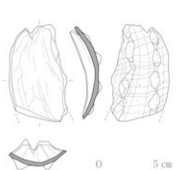


図12　SK－01出土遺物

4．検出遺構と出土遺物（図11～31、表5～9）

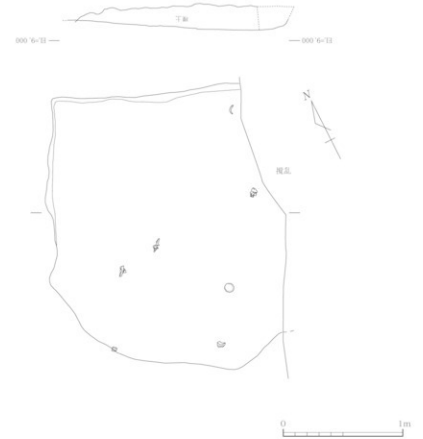


図１３　ＳＫ－０２実測図

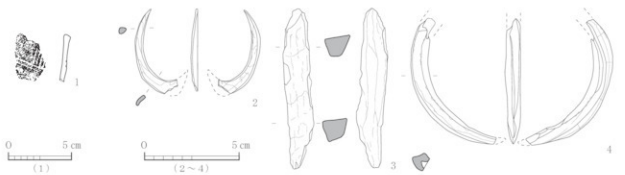


図１４　ＳＫ－０２出土遺物

（1）ＳＫ－０１(図 11、12)

Ｃ－５、６グリッドⅢ層上面で検出された人頭大の石灰岩が敷き詰められた敷石遺構である（図 11)。平面は、直径約 200㎝の円形状を呈する。深さは 80㎝ほどあり、Ⅲ、Ⅳ層をほぼ垂直に掘り込んで設置される。底面は概ね水平に整えられ、比較的大形のサンゴ礫が充填される。敷石の直上には薄い粘土層が認められ、その最下部は被熱のため硬化していた。住居跡の可能性も考えられるが、遺構の詳細な性格は確定できなかった。

遺物は、ヤコウガイの殻を加工した匙状の製品が１点のみ出土している (図 12)。

図１５　ＳＫ－０３実測図

(2) ＳＫ－０２(図 13、14)

Ｂ－４．５、Ｃ－４・５グリッドのⅣ層中で検出された方形を呈する竪穴状遺構で（図 13)、埋土中からは人工遺物、自然遺物が僅かに検出された。遺構の東半は撹乱によって破壊されている。本遺構の直下からはＳＫ－１０、ＳＫ－１１が検出された。残存長 230cm、残存幅 200cmであった。炉跡や柱穴等の付随施設は確認できなかった

出土遺物は、沈線文を主体とする土器(図 14 － 1)と釣り針状を呈するヤコウガイ製品(図 14 － 2)、クジラと推定される海獣骨の加工品(図 14 － 3)、猪牙製品(図 14 － 4)がある。

(3) ＳＫ－０３(図 15、16)

Ｃ－２グリッドⅥ層中に検出された方形状を呈する掘り込み遺構で（図 15)、埋土からは人工遺物、自然遺物が比較的多く検出された。西半部は撹乱によって破壊されている。遺構北より中央部には炉跡と見られる灰層が認められ、その東側には柱穴の可能性があるピットが検出された。また、灰

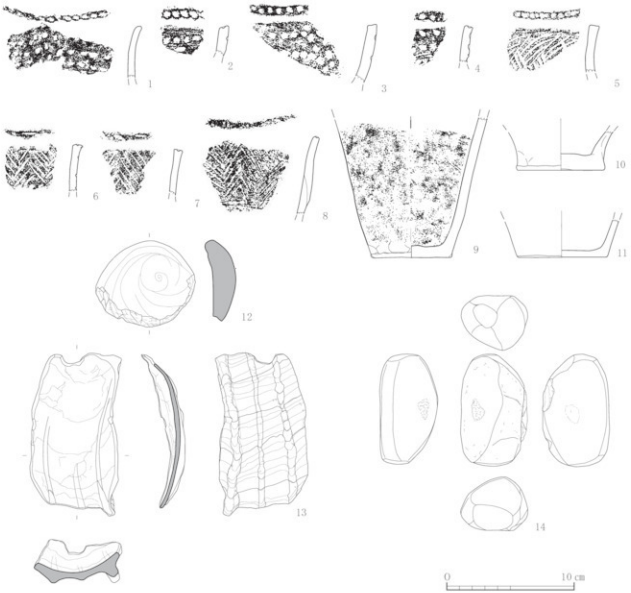


図16　ＳＫ－03出土遺物

層に南隣してシャコガイが集中的に出土する箇所認められ、下半出土のものは被熱していた。残存する平面規模は、長さ290cm、幅225cmであった。

遺構埋土からは、刺突文を有する土器(図16－１～４)、沈線文が施された土器（図16－４～８)、底部（９～11)、敲打痕が認められるヤコウガイ蓋(図16 － 12)、ヤコウガイ製匙状製品(図16 － 13)、敲石(図16 － 14)が出土している。

(4) ＳＫ－04(図17、18)

Ｃ－２区グリッドのⅥ層中に検出された半月状を呈する素掘りの竪穴状遺構で（図17)、遺構内からは人工遺物、自然遺物が比較的多く得られた。遺物は遺構内の西半で多く確認されたが、とりわけ北壁付近に集中していた。遺構の北半は調査区外に延びていると推定される。炉跡や柱穴等の付随施設は確認できなかった。隣接するＳＫ－０３との切りあい関係は明確ではなかった。遺構の

図17　SK－04実測図

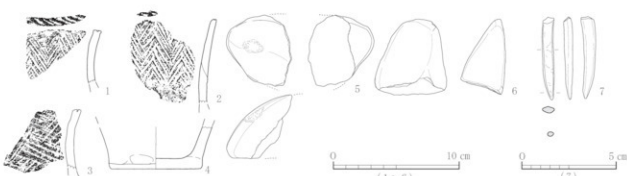


図18　SK－04出土遺物

残存長は280㎝、残存幅は220㎝であった。

遺構の埋土から、沈線文を有する土器(図18 - 1～4)、敲石(図18 - 5)、磨石(図18 - 6)、獣骨を研磨した針状製品(図18 - 7)が出土した。

(5) SK－05(図19、20)

B－1・2、C－1・2グリッドのⅣ層上面で検出された素掘りの竪穴状遺構で（図19)、遺構内や周辺からは人工遺物、自然遺物が僅かに出土した。北半のプランは不明瞭であったものの、平面形は方形状を呈し、遺構の東半は調査区外に延びていると予想される。柱穴状跡等の施設は確認できなかった。残存長200㎝、残存幅180㎝を計る。

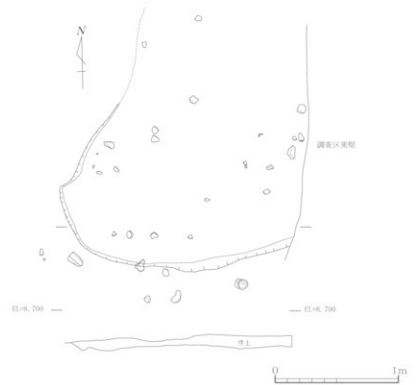


図19　SK－05実測図

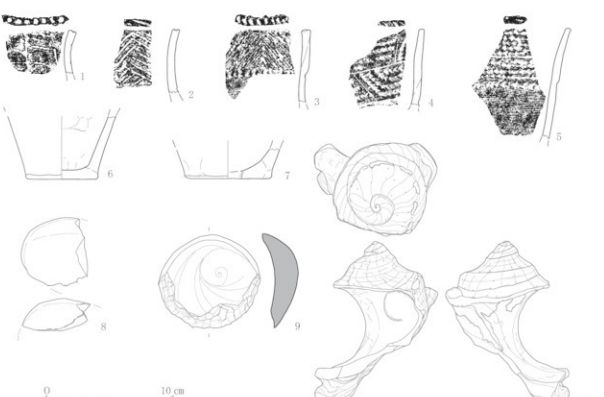


図20　SK－05出土遺物

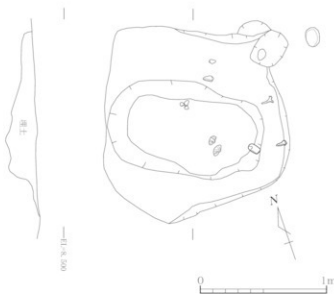


図21　SK－06実測図

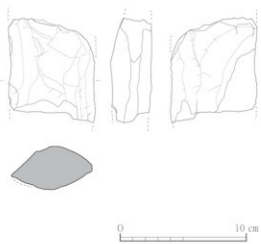


図22　SK－06出土遺物

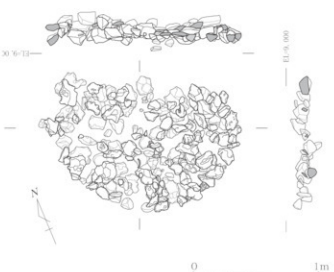


図23　SK－07実測図

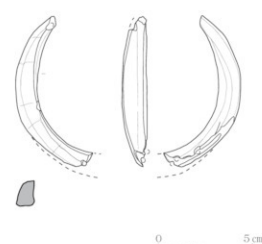


図24　SK－07出土遺物

遺構埋土と遺構周辺からは、沈線文を主体とする土器（図20 - 1～3）、押し引き上の刺突文を有する土器（図20 - 4、5）、土器底部（図20 - 6、7）、磨石（図20 - 8）、敲打痕が認められるヤコウガイ蓋（図20 - 9）、体層部が大きく割り取られたヤコウガイ片（図20 - 10）が出土している。

（6）SK－06(図21、22)

B－3グリッドⅣ層中より検出された方形状の土坑である（図21）。埋土からは人工遺物、自然遺物が僅かに出土した。底面の中央部は一段下げられており、楕円形の掘り込みが認められた。また、

図25　ＳＫ－０８実測図

遺構の北東隅にはピット状の掘り込みが確認された。遺構の残存長は150㎝、残存幅は140㎝であった。

埋土からは石斧の破損品と見られる石器が出土している（図22）。被熱のため黒色化しており、表面には部分的に剥落箇所が認められる

（7）ＳＫ－０７（図23、24）

Ｂ－３・４グリッドⅢ層中より検出された平面形円形を呈する集石遺構である（図23）。砂層に半球状の掘り込みを設け、その中に大小の礫が充填されている。集石の大半は焼けていた。遺物はさほど出土していないが、埋土中からは炭化物が多く検出された。炉として使用されていた可能性がある。残存長165㎝、残存幅110㎝を計る。遺物は、猪牙を研磨した有孔骨製品が得られた（図24）。

（8）ＳＫ－０８（図25、26）

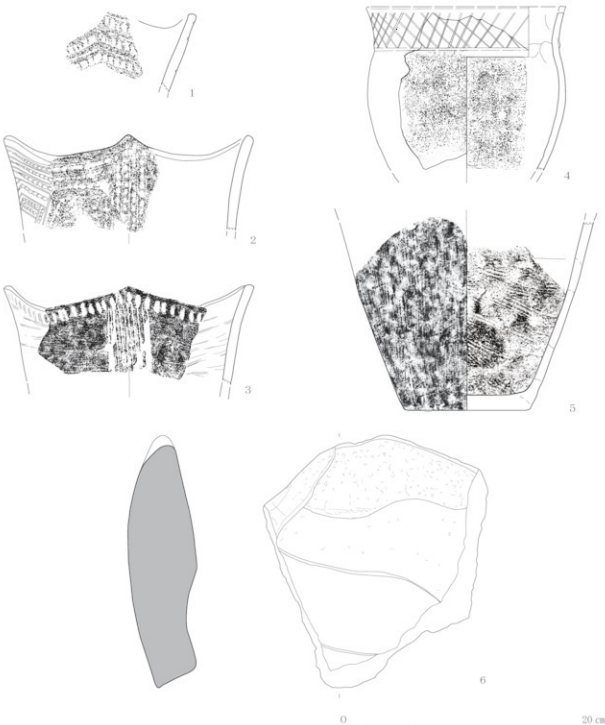


図２６　ＳＫ－０８出土遺物

Ａ－３・４・５グリッドのⅢ層中より検出された大型の敷石遺構で、遺構の表面からは炭化物が密に確認された。平面規模は長軸790㎝、短軸625㎝であった。遺構の南半は調査区外に延びており、平面形の詳細を把握するため、南北方向に２箇所のトレンチ(南トレンチ１、２)を新たに設定し、掘り下げを行った。その結果、一部は撹乱によって破壊されているものの、両トレンチともに敷石が確認された。平面形は隅丸方形状を呈すると予想される。断面の観察によると、Ａ－４グリッド

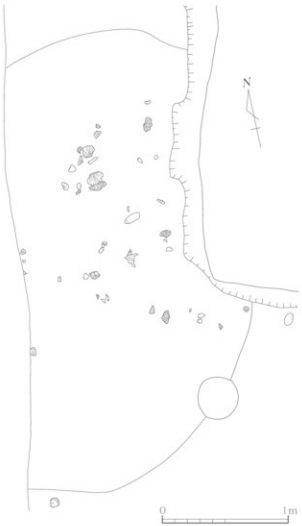


図27　SK－09実測図

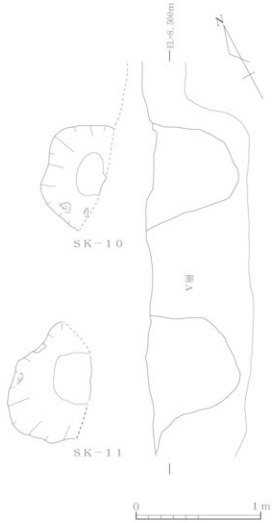


図28　SK－10・SK－11実測図

付近において堀り込みが認められ（図10のe面断面）、中形礫の充填が確認された。その上面には小形礫が面的に敷き詰められていた。なお南トレンチ1、2で確認された遺構の一部は、校庭の地下に保存されることとなった。

遺構内からは集石に伴って、人工遺物と自然遺物が出土している。土器に限ってみると、他の遺構に比べ形状が復元できるほどの大きさを留める資料が比較的多く得られた。遺物は刺突文を主体とする土器（図26－1～3）、沈線文が施された土器（図26－4）、土器底部（図26－5）、石皿の破片（図26－6）などがある。

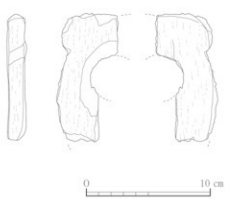


図29　SK－11出土遺物

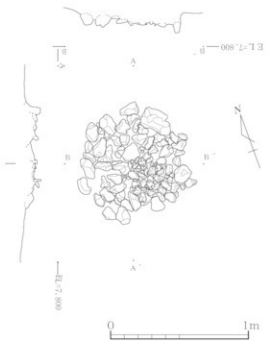


図30　SK－12実測図

図31　SK－13実測図

(9) SK－09(図27)

D－7、8グリッドのⅢ層中で確認された素掘りの竪穴状遺構である。遺構の西半は調査区外に延びており、北東隅の一部は攪乱によって破壊されている。埋土からは人工遺物と自然遺物がわずかに検出された。平面規模は、残存長350cm、残存幅170cmであった。

(10) SK－10(図28)

C－4グリッドⅤ層中、SK－02の直下から検出された土坑である。過半は攪乱によって破壊されていた。規模は、残存長87cm、残存幅33cm、深さ69cmであった。遺構内に遺物は含まれていなかった。

(11) SK－11(図28、29)

B－4グリッドⅤ層中、SK－02の直下から検出された土坑である。埋土からは礫が出土した。SK－10と関連する遺構と見られるが、その性格は明らかにできなかった。一部は攪乱によって破壊されている。規模は残存長96cm、残存幅69cm、深さ75cmを計る。

遺物は、海獣骨を扁平に成形し、側縁に抉り、中央部に穿孔を加えた製品が1点のみ出土している。

(12) SK－12(図30)

B－3グリッドのⅥ層下面で確認された集石遺構である。平面形は円形を呈する。遺構の規模は残存長115cm、残存幅110cmで、他の集石遺構と比べると規模は小さい。出土遺物は土器片と炭化物がわずかに出土した。校舎建設の基礎工事の影響は及ばないため、現況の記録後、地下に保存することとなった。

表５　緊急調査検出遺構観察表

図	遺構名	種別	検出層	平面規模（cm）	深さ（cm）	備考
11	ＳＫ－０１	敷石遺構	Ⅲ層	240×230	55	
13	ＳＫ－０２	竪穴状遺構	Ⅳ層	230×200	20	
15	ＳＫ－０３	竪穴状遺構	Ⅵ層	290×225	24	灰層あり（炉跡か）
17	ＳＫ－０４	竪穴状遺構	Ⅵ層	220×280	24	
19	ＳＫ－０５	竪穴状遺構	Ⅳ層	180×200	10	
21	ＳＫ－０６	竪穴状遺構	Ⅳ層	140×150	30	
23	ＳＫ－０７	集石遺構	Ⅲ層	110×165	50	
25	ＳＫ－０８	集石遺構	Ⅲ層	790×625	74	
27	ＳＫ－０９	竪穴状遺構	Ⅲ層	170×350		
28	ＳＫ－１０	土坑	Ⅴ層	33×87	69	
28	ＳＫ－１１	土坑	Ⅴ層	69×96	75	
30	ＳＫ－１２	集石遺構	Ⅵ層	110×115	20	
31	ＳＫ－１３	集石遺構	Ⅳ層	105×200		

表６　緊急調査出土土器観察表

図	番号	分類	位置	層位	胎土	混和材	内面調整	外面調整	文様	焼成	備考
14	1	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０２埋土	やや粗い	砂粒	ナデ・指おさえ	ナデ	沈線文	良好		
16	1	Ⅱ群－Ａ－３－①	ＳＫ－０３埋土	やや良い	砂粒	ナデ・指おさえ	ナデ	刺突文、押し引き様	良好		
16	2	Ⅱ群－Ａ－２－①	ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	条痕調整	刺突文	良好		
16	3	Ⅱ群－Ａ－３－①	ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	条痕調整	条痕調整	刺突文、押し引き様	良好		
16	4	Ⅱ群－Ｂ－４	ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	刺突、沈線文	良好		
16	5	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	条痕調整	ナデ	沈線文	良好		
16	6	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好		
16	7	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０３埋土	粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好		
16	8	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０３埋土	粗い	砂粒	条痕調整	ナデ	沈線文	良好		
16	9		ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	条痕調整	ナデ		良好	底径6.4ｃｍ	
16	10		ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ、指押さえ		良好	底径7.0ｃｍ	
16	11		ＳＫ－０３埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ		良好	底径7.0ｃｍ	
18	1	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０４埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好		
18	2	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０４埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線文	良好		
18	3	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０４埋土	やや粗い	砂粒	条痕調整	ナデ	沈線文	良好		
18	4	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０４埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ		良好	底径7.2ｃｍ	
20	1	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０５埋土	やや粗い	砂粒、チャート	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	沈線文	良好		
20	2	Ⅱ群－Ｂ－２	ＳＫ－０５埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	ナデ	沈線、刺突	良好		
20	3	Ⅱ群－Ｂ－２	ＳＫ－０５埋土	やや粗い	砂粒	ナデ	条痕調整、ナデ	沈線、刺突	良好		
20	4	Ⅱ群－Ｂ－４	ＳＫ－０５埋土	やや良い	砂粒	ナデ	ナデ	押し引き様、沈線文	良好		
20	5	Ⅱ群－Ｂ－４	ＳＫ－０５埋土	やや良い	チャート	条痕調整	条痕調整	押し引き様、沈線文	良好		
20	6			やや粗い	砂粒	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ		良好	底径5.5ｃｍ	
20	7			やや粗い	チャート、砂粒	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ		良好	底径6.6ｃｍ	
26	1	Ⅱ群－Ｂ－４	ＳＫ－０８埋土	粗い	砂粒、石英	条痕調整、ナデ	ナデ	刺突、沈線文	良好	底径20ｃｍ	
26	2	Ⅱ群－Ｂ－６	ＳＫ－０８埋土	やや粗い	砂粒、石英	ナデ	条痕調整	沈線、刺突	良好	底径20ｃｍ	
26	3	Ⅱ群－Ａ－４－①	ＳＫ－０８埋土	良い	砂粒	条痕調整、ナデ	条痕調整、ナデ	沈線文	良好	底径16ｃｍ	
26	4		ＳＫ－０８埋土	やや粗い	砂粒、チャート	条痕調整、ナデ	条痕調整、ナデ		良好	底径10ｃｍ	
26	5	Ⅱ群－Ｃ－１	ＳＫ－０８埋土	やや粗い	砂粒、チャート	ナデ	ナデ	刺突、沈線文	良好		

表７　緊急調査出土貝製品観察表

図	番号	貝種	位置	層位	成形	調整	残存長(cm)	残存幅(cm)	重量(g)	備考
12	1	ヤコウガイ	ＳＫ－０２	埋土	打割	研磨	8.5	4.8	33.0	
14	2	ヤコウガイ	ＳＫ－０２	埋土		研磨	4.5	0.5	6.0	釣針状製品
16	12	ヤコウガイ	ＳＫ－０３	埋土			6.8	7.8	143.0	
16	13	ヤコウガイ	ＳＫ－０３	埋土	打割	研磨	12	6.9	123.0	
20	9	ヤコウガイ	ＳＫ－０５	埋土			7.2	8.0	161.0	
20	10	ヤコウガイ	ＳＫ－０５	埋土	打割		13	10.0	321.0	

表８　緊急調査出土骨製品観察表

図	番号	種別	位置	層位	成形	調整	長辺(cm)	短辺(cm)	重量(g)	備考
14	3	鯨骨?	ＳＫ－０２	埋土		研磨?	8.5	1.4	9.0	
14	4	猪牙	ＳＫ－０２	埋土		研磨	7.0	1.0	6.0	
18	7	イノシシ?	ＳＫ－０４	埋土		研磨	4.4	0.5	1.0	
24	1	猪牙	ＳＫ－０７	埋土		研磨	7.9	1.2	11.0	穿孔あり
29	1	鯨?	ＳＫ－１１	埋土		研磨?	10.2	4.5	47.0	抉りあり

表９　緊急調査出土石器観察表

図	番号	種別	位置	層位	成形	調整	長辺(cm)	短辺(cm)	重量	備考
16	1	砂岩	ＳＫ－０３	埋土			8.7	4.5	307	磨石、叩石
18	5	緑色片岩	ＳＫ－０４	埋土			5.5	4.0	132	磨石、叩石
18	6	砂岩	ＳＫ－０４	埋土			6.0	5.8	122	磨石
20	8	緑色片岩	ＳＫ－０５	埋土			5.3	5.1	96	
22	1	緑色片岩	ＳＫ－０６	埋土	打割		7.5	7.0	208	石斧?
26	6	砂岩	ＳＫ－０８	埋土			13.0	20.3	2515	

(13) ＳＫ－１３(図31)

Ａ－３グリッドⅣ層中で確認された集石遺構である。平面の規模は、長軸200cm、幅105cmであった。礫が不規則に配置されており、平面の形状は定まっていない。炭化物がわずかに得られている。

(14) ピット群

その他の遺構としては、Ｂ－４.５グリッドのⅢ層中で検出されたピット群がある。遺物は出土しておらず、配列に規則性が認められなかったためその性格は明らかにできなかった。

(15) 小結

2002年度における緊急調査で発見された遺構の検出状況を検出層別に整理すると、以下の通りとなる。

Ⅲ層中：ＳＫ－０１(敷石遺構)、ＳＫ－０７(集石遺構)、ＳＫ－０８(集石遺構)、ＳＫ－０９(素掘りの竪穴状遺構)、ピット群

Ⅳ層中：ＳＫ－０２(素掘りの竪穴状遺構)、ＳＫ－０５(素掘りの竪穴状遺構)、ＳＫ－０６(素掘りの竪穴状遺構)、ＳＫ－１３(集石遺構)

Ⅴ層中：ＳＫ－１０(土坑)、ＳＫ－１１(土坑)

Ⅵ層中：ＳＫ－０３(素掘りの竪穴状遺構)、ＳＫ－０４(素掘りの竪穴状遺構)、ＳＫ－１２(集石遺構)

集石遺構は、炭化物が多く検出される傾向にあることから、火を使用する施設としての機能が考慮される。また、素掘りの竪穴状遺構の性格については不明な点が多いが、ＳＫ－０３のように、遺構の床面に炉跡と推定される灰層が伴う例も確認されていることから、住居跡として利用されていた可能性が想定される。

第Ⅴ章
自然科学的分析

第Ⅴ章．自然科学的分析

1．面縄第２貝塚2002年調査で採集された脊椎動物遺体の概要

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

徳之島南岸の伊仙町に所在する面縄第２貝塚では，2002 年度に実施された発掘調査において，貝塚時代前４期（縄文時代後期並行期）の遺構や包含層から多数の脊椎動物骨（魚骨・鳥獣骨など）が出土した．ここでは，これらの骨類の概要を報告し，その特徴について予察する．

（１）分析資料

採集された資料には，ピックアップ資料（発掘時に現場で目視確認され，手で取り上げられた資料）と，水洗選別資料（堆積物サンプルを水洗選別して回収された資料）がある．現時点において，水洗選別資料および遺構出土のピックアップ資料については，一部を除き分析を終えた．ピックアップ資料のうち包含層出土資料については現在分析中である．

（２）分析結果（暫定）

①ピックアップ資料

表１０　面縄第２貝塚２００２年調査において遺構から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP，暫定結果）

種類	SK-01	SK-02	SK-03	SK-04	SK-05	SK-06	SK-07	SK-08	SK-09	SK-10	pit15	pit17	合計	
サメ類									1				1	
ウツボ科		1	2	1					1				5	
ダツ科				1									1	
マハタ型		2	1										3	13
スジアラ型		2											2	
ハタ科		3	1										4	
ハタ型		1	1	2									4	
フエダイ科				1									1	
クロダイ属		1											1	1
ヨコシマクロダイ		1	2										3	
ハマフエフキ型				1						1			2	20
フエフキダイ属	1		1	2			1						5	
フエフキダイ科		1	4	5									10	
タイ型		1	1	4			1		1				8	
ベラ科A			1	1									2	6
ベラ科B		1											1	
ベラ科（他）				1									1	
ベラ科		1		1									2	
アオブダイ属		12		1	1								14	19
ブダイ科	1	3		1									5	
ニザダイ科		1	2	6					<1>			<1>	9	
ホンヅラカワハギ科		1											1	
ハリセンボン科		1	1										2	
真骨類・保留		2	5		1				2				10	
ウミガメ				1	<1>		1						2	
鳥類			3	2									5	
ネズミ科									2				2	
ウサギ科		3	5	8	1	1							18	
イヌ		2											2	
イノシシ		4	25	15	2	5	4	4	19		1	1	80	
陸棲哺乳類			1	+				1	1			1	4	
クジラ		2								1			3	
鳥類／哺乳類									1				1	
合計	2	46	56	54	5	6	7	5	28	2	1	2	214	

表11　面縄第2貝塚2002年調査において包含層から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の概要

●多い、△普通、＋少ない　※：同じ注記の袋が複数有る場合は、袋ごと記載した。

層準・位置	魚類													爬虫類		鳥類	哺乳類			
	ウツボ科	アナゴ科	ハタ科	フエダイ科	クロダイ科属	ヨコシマクロダイ	フエフキダイ科	ベラ科	ブダイ科	アイゴ属	ニザダイ科	モンガラカワハギ科	ハリセンボン科	ヘビ類	ウミガメ類	未同定	ネズミ科	ウサギ科	イヌ	イノシシ
Ⅲ層 A-5							＋		＋		＋								●	
Ⅲ層最下部～Ⅳ層5cm 先行トレンチ			●	＋			＋	＋		△		＋					＋	＋		●
Ⅲ層・Ⅳ層（白砂層）			＋						＋								＋		＋	△
Ⅳ層（白砂層）B-2							＋									＋				＋
Ⅳ層5cm～最下部 先行トレンチ	＋								＋									＋		△
Ⅳ層最下部 先行トレンチ	＋		△	＋			△		＋		＋		＋				＋			＋
Ⅴ層（黒砂層）＊			＋		＋	＋	＋	＋	△		＋		＋		＋				＋	＋
Ⅴ層（黒砂層）＊	＋		＋	＋		＋	△	＋	＋							＋				＋
Ⅴ層（黒砂層）＊					＋				＋			＋			＋				＋	＋
Ⅴ層（黒砂層）＊			＋		＋			＋	△			＋			△					△
Ⅴ層（白砂）試掘トレンチNo.1 C-1											＋		＋	＋						＋
Ⅶ層 B-2			●				△	＋			＋	＋			＋	＋	＋			△
Ⅶ層 C-2＊		＋	●				●	＋		＋	＋							△		
Ⅷ層 C-2＊								＋												●

表12　面縄第2貝塚2002年調査の水洗選別資料から検出された脊椎動物遺体の組成（NISP）

4mm・2mm のいずれかの表示がないサンプルは、そのメッシュから同定対象となる骨が検出されなかったことを示す（1mm メッシュからは遺体が検出されなかった）。
<>を付したもの（歯・鱗・棘）は合計値に含めていない。

種類	SK-01									SK-03	SK-07					SK-08	合計		
	上位M1	上位M3	上位理土		中位理土			下位理土		M1	M1					M1			
	北東1/4	北西1/4	北東1/4	南西1/4	北東1/4		南西1/4	北東1/4	-	-	上20cm-下30cm	上30cm-下50cm	最下層	b-7					
	2mm	2mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	2mm	4mm	2mm	2mm	4mm	2mm	2mm	4mm	4mm	4mm	2mm	合計
ウツボ科				1						1					1	1	2	3	
ハタ科									2	2							2	2	4
ハタ型										1							1	1	
アジ科？									1								1		1
フエフキダイ科			1		1				1								3		3
タイ型			<1>														+	+	+
スズメダイ科													1				1	1	
ベラ科	1												1				2	2	
ブダイ科	1						1				1						1	2	3
ニザダイ科										4			1				5	5	
アイゴ属									2	3							2	3	5
カレイ目										1								1	1
ハコフグ科									<1>	<3>							+	+	+
ハリセンボン科								1		<1>								1	1
真骨類・未同定									2	1							2	1	3
真骨類・保留					1	1			4	26			1				6	27	33
真骨類・同定不可		1			1		1			8				2			1	12	13
ヘビ類			1										1				1	1	2
ネズミ亜科														1			1	1	
小型哺乳類・保留			1															1	1
イヌ										1								1	1
合計	2	2	1	1	1	1	2	1	12	47	1	3	5	1	1	1	20	64	84

遺構出土資料の暫定的な同定結果を表10に示した．また，分析中の包含層出土資料についても，一部資料の内容を概観した結果を表11に示した．

脊椎動物全体の組成をみると，多様な魚類とイノシシを主とする陸獣類が大半を占めており，他にウミガメ類，鳥類，海獣類（クジラ類）が確認されている．

魚類はハタ科，フエフキダイ科，ブダイ科，ベラ科，ニザダイ科などが多い．ハタ科はマハタ属と思われるものが多いが，スジアラに類するものもみられる．フエフキダイ科はフエフキダイ属（前上顎骨はハマフエフキに類するものが主体）が多く，他にヨコシマクロダイが確認されている．ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨は今のところすべてアオブダイ属である．ベラ科は咽頭骨からみて多様な種が混在していると思われる．そのほかにウツボ科，ハリセンボン科なども普通にみられる．出土した魚類の大半は奄美・沖縄諸島のサンゴ礁域の普通種で占められている．

哺乳類はイノシシが圧倒的に多く，ウサギ科（アマミノクロウサギと思われる）も普通である．他にネズミ科，イヌが確認された．ネズミ科の顎骨はすべてネズミ亜科で，かなり大型の個体もみられることから，ケナガネズミが含まれている可能性が強い．

②水洗選別資料

同定結果の概要を表12に示した．検出数は少ない．大半は魚骨で，他にヘビ類の椎骨，ネズミ亜科やイヌの歯がわずかに確認された．魚類組成については資料数が少ないため特徴を読み取りにくいが，ウツボ科，ハタ科，フエフキダイ科，ブダイ科，ニザダイ科，アイゴ属の出現頻度が比較的高い．ピックアップ資料とおおむね同傾向だが，アイゴ属やウツボ科がやや多い．

（3）予察

本遺跡の脊椎動物遺体群にみられるサンゴ礁魚類とイノシシを主体としてウミガメ類や海獣類が混じる組成は，奄美・沖縄の貝塚時代前期～後期に普遍的にみられる特徴（樋泉 2011）と合致する．

魚類はハタ科，フエフキダイ科，ブダイ科などの多様なサンゴ礁性魚類が混在しており，突出した優占種がない．こうした特徴は，本遺跡と同じ徳之島南海岸に位置するトマチン遺跡（貝塚時代前5期．樋泉 2013）をはじめ，奄美諸島の貝塚時代の特徴（名島 2003，樋泉 2006）と合致しており，ブダイ科またはフエフキダイ科・ベラ科など，特定の種類が卓越する沖縄諸島とは傾向が明確に異なる．

哺乳類については，イノシシが圧倒的に多く，ネズミ類，イヌ，海獣類などが混じる点で，奄美・沖縄の貝塚時代前期～後期に普遍的な特徴（樋泉 2011）を示している．いっぽう，ウサギ類については，これまでにアマミノクロウサギが徳之島の面縄第1・第2・第4貝塚，犬田布貝塚，ヨヲキ洞穴で確認されており（西中川 2011），今回得られた資料もアマミノクロウサギに同定される可能性が強い．この点は徳之島に固有の特徴といえる．

参考文献

樋泉岳二（2006）「脊椎動物遺体にみる奄美と沖縄」木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易2－奄美・沖縄の発掘調査から－』熊本大学文学部：101-114頁。

樋泉岳二（2011）「琉球先史時代人と動物資源利用－脊椎動物遺体を中心に－」高宮広土・伊藤慎二（編）『先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』六一書房：109-131頁。

樋泉岳二（2013）「トマチン遺跡出土の脊椎動物遺体」，新里貴之（編）『徳之島トマチン遺跡の研究』，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター：174-185頁。

名島弥生（2003b）「琉球列島における遺跡出土魚種組成の比較」『東海史学』38：75-96頁。

西中川　駿（2011）『遺跡から出土する動物たち』西中川駿先生古希記念論集刊行会．

2．面縄第2貝塚の貝類遺体（予察）

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

（1）分析資料の概要

面縄第2貝塚は、徳之島伊仙町に位置する沖縄貝塚時代前4期（嘉徳式期:縄文後期並行期）の遺跡である。本遺跡の貝類遺体については、リストは示されているものの、組成に関しては報告されていない。

今回、2002年度の発掘調査で確認されたピックアップ資料の貝類遺体について、検討する機会を与えて頂いた。一部未検討の資料も残ったが、ここに概要を報告したい。資料の大部分を報告者が同定し、一部のものについては、この同定を元に、資料室の方に処理頂いた。検討の機会を与えて頂き、御世話になった伊仙町教育委員会の新里亮人氏と資料室の方々に御礼申し上げる。

（2）結果および考察

今回検討できたものの詳細な出土組成を表13に示した。表中の面縄第2貝塚2002Aは包含層の個体を示し、撹乱層のものも含めてある。これは、撹乱層からはほぼ嘉徳式土器のみが出土しており、貝類遺体も一部には現代のものも存在したが、ほとんどは同時期のものと判断できたためである。表中の同Bは遺構に伴うものである。詳細な組成の検討や他の遺跡との比較は、次回に行うこととし、現時点で確認できる貝類遺体の特徴を挙げておきたい。

出土した貝類遺体では、サンゴ礁域の貝類が出土のほとんどを占め、河口域や淡水域・陸域のものは極めて少なかった。ただ、徳之島でも僅かに生息が知られているマングローブ林に生息するシレナシジミは、この種が生息しない島の貝塚時代の遺跡からも出土しており、同様に本遺跡でも持ち込まれたものと考えられる。

巻貝類（腹足類）が大半であり、シャコガイ類とイソハマグリ以外の二枚貝類は少数であった。全体として、中大形種が多く、その中でも、マガキガイ・チョウセンサザエ・ヤコウガイ・オキニシ・シャコガイ類等の割合が高かった。本遺跡の前面にはサンゴ礁が存在し、イノー（礁池）も存在するが、よく発達しているわけではない。イノー内に生息するマガキガイが極めて多いということは、当時のイノーの状況に起因する可能性もあるが、本種に対するかなり強い選択性が存在したことも想定される。一方、干瀬（礁嶺／リーフ）で見られるオキニシは、徳之島のトマチン遺跡や沖永良部島の住吉貝塚でも多く出土しており、本地域で好まれていた可能性も考えられる。貝製品の素材となるゴホウラも少数ながら確認されている。包含層と遺構の相違は大きくないようであったが、遺構ではシャコガイ類が多いことも考えられた。ただ、SK-03にはミミガイが集中しており、奄美大島では同じ科に属するイボアナゴの集中する土坑が知られており（用安良川遺跡）、もしかすると、特異な利用に起因するものかも知れない。

本遺跡と同時代の沖縄諸島の遺跡では（前4期）、サンゴ礁の種が優占するものの、小形種の多いことが指摘されている。本遺跡ではピックアップ法によるサンプリングなので、小形種が欠落している可能性も否定できないが、中大形種の多いことは特筆されよう。貝類の種組成からは、沖縄諸島の貝塚時代後期と類似している。ただ、沖縄に多いサラサバテイラはそれほど多くはないようである。このことから、この地域では前4期の段階で、ある程度のイノーが

発達したサンゴ礁の存在が確認できる。また、嘉徳式に後続する土器形式の伊仙町の犬田布貝塚では、水洗選別による抽出も行われており、陸産のヤマタニシ類が極めて多く、小形のアマオブネ類やカサガイ類も優占しており、中大形種が優占する面縄第二貝塚の状況とは異なるようである。そして、奄美大島の北部の貝塚時代後期（兼久式期）では、本遺跡でも多かったヤコウガイが多く出土する遺跡でも、岩礁潮間帯のリュウキュウヒバリ・アマオブネ類・コウダカカラマツの優占する遺跡も認められており（用見崎遺跡・用安良川遺跡・マツノト遺跡等）、やはり本遺跡の在り方とは異なっていた。今後、詳細に組成を検討し、また面縄貝塚群の時期と立地の異なる地点との比較を行うことによって、極めて興味深い結果が得られることは確実であろう。

表13　面縄第2貝塚出土貝類遺体の詳細組成

科名	和名	生息場所類型	面縄第2貝塚2002A								面縄第2貝塚2002B											
			撹乱	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	SK-01	SK-02	SK-03	SK-04	SK-05	SK-06	SK-07	SK-08	SK-09	SK-10	SK-11	SK-13
軟体動物門／腹足綱（海産） Mollusca / Gastropoda (marine)																						
ツタノハ科 Patellidae																						
	ツタノハ	Ⅰ-3-a	3	1		1	2	2						2					1			
ヨメガカサ科 Nacellidae																						
	ヨメガガサ	Ⅰ-1-a								1			1									
	クルマガサ	Ⅰ-0-a					1															
	オオベッコウガサ	Ⅰ-1-a	1,2f							1f												
	ベッコウガサ	Ⅰ-0-a								2												
ユキノカサ科 Lottiidae																						
	カモガイ	Ⅰ-0-a					3															
ミミガイ科 Haliotidae																						
	イボアナゴ	Ⅰ-2-a	2,1u			1u																
	マアナゴ	Ⅰ-3-a	3			1	1f	3f		1u			1									
	ミミガイ	Ⅰ-3-a	1,15u,32f		1u		3u,24f	22f	P	2u,6f		1	3,10u,28f	2u,2f	2,1f	1,1f						
リュウテン(サザエ)科 Turbinidae																						
	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	43(3H),1jH,40b,22u,70f	2,1u,7f	2f	7(2H,2bL),3b,3u,16f	1,1b,4u,17f	5,2b,5u,38f	2	3u,16f		2f	8,32f	1,5u,22f	4f	2u,6f	1u		1,2(1j)u,5f			1f
	チョウセンサザエ/フタ		37	3	1	9	3	4		1,1f		1	12	4				1	2			
	リュウテン	Ⅰ-4-b						1u														
	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	9(8bL),22(2j)b,32(1j,1e)u,210f	1uj,1ol,9f	1u,5f	3(1bL,1bLj),2u40f,	1bL,4b,2u,36f	1j,2b,4u,41f	1bL,2u,3f	2u,21(1j)f	2(1A)f	7f	2b,2u,14f	2(1j)u,18f	1u,3f	2f		5f	1u,11f			
	ヤコウガイ/フタ		32,17f	1		10	1,6f	1,8f	3	2		1,1f	1f		3		1f		1f			
	オオウラウズ	Ⅰ-2-a	P																			
ニシキウズ科 Trochidae																						
	ニシキウズ	Ⅰ-2-a	4,8b,5f	P		2	3b	2	2f	1b,2f			2	5f		1f						
	ムラサキウズ	Ⅰ-3-a	1,5b,2u,1f		1f	2b		1b,13f														
	ウズイチモンジ？	Ⅰ-4-a	1b	2b																		
	ギンタカハマ	Ⅰ-4-a	8b,7f,20u	1u		1,1u,6f	1u,9f	2f		1u,5f				1u,5f	2f		1f	1u				
	サラサバテイラ	Ⅰ-4-a	1,6(1e)b,8(1A?)f	4f		1,2f	9f	P	P	4f			6f	1u,14f		1f			1f			
	ニシキウズ科不明									4f												
アマオブネ科 Neritidae																						
	イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a							1b	1												
	コシダカアマガイ	Ⅰ-1-b	1,1b	1b			6b,4f	2	P	1												
	アマオブネ	Ⅰ-1-b	2(1h),1bh			1		2,3b,2f		1,2b				1b,1f					1b			
	ニシキアマオブネ	Ⅰ-1-e	1,1b	1		1,2f		1f	P	3,1b												
	アマオブネ科不明									1f												
オニノツノガイ科 Cerithiidae																						
	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c	7mL,6b,13u,7f	1,3f		2,1b,2u,9f	1u,2f	1b,2u,7f	1f	1b,8u,9f		1f	2,1b,13u,39f	1u	1,1u		1f		2u			
	コオニノツノ	Ⅰ-2-a		1u																		
	メオニノツノ	Ⅰ-4-b	2e																			
スイショウガイ科 Strombidae																						
	ムカシタモトガイ	Ⅰ-2-c	P			1	1	1u														
	マガキガイ	Ⅰ-2-c	266(9j),13b,11u,10f	17(1j)1u,3f	3,1f	70(1j),5u,7f	42,3u,1f	36,8f	2,3f	14,3f		2,2u,1f	31,13u,17f	25,4f	12	8,1f	1	10	8,2u,5f			4,1f
	イボソデガイ	Ⅰ-2-c	1mL				1u															
	ゴホウラ	Ⅰ-4-c	1b,1old			1f	2f		1f													
	クモガイ	Ⅰ-2-c	1dL,3u+ol,19u,20il,20ol,69f	5b,1u,8f	7f	5u,43f	1f	4u,21f	2u,21f	1u				2b,3u,25f	5f	6f	3f		1u,26f			
	ラクダガイ	Ⅰ-4-c	1j,71u,2f						1f				1f					1f				
	スイジガイ	Ⅰ-2-c	4d,1u+il,6(1e)u,5il,4(1e)ol,35(1B)f	1f		5,1u,5f	4(1j),1ju,1f	2u,5f	1,12f	4f	1	11u,6ol,33f	1u,57f	1b,1u,2f					5f			
スズメガイ科 Hipponicidae																						
	アツキクスズメ	Ⅰ-3-a					3															
ムカデガイ科 Vermetidae																						
	フタモチヘビガイ	Ⅰ-2-a	2e	1f			4f	2f		1f												
	リュウキュウヘビガイ	Ⅰ-2-a	2e					1f														
タカラガイ科 Cypraeidae																						
	キイロダカラ	Ⅰ-1-a	3(1e)			P	1,3f		1,3f	2f			1						1			
	ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	2,1il,1ol			P			1,2f	3f			2									
	コモンダカラ	Ⅰ-2-b						2f														
	ハナマルユキ	Ⅰ-3-a	1,6u+il,4il,14(2e)ol,3f	1f		11f	1b,29f	10f		4f			6f	2,2f	1f				1,2f			
	ハチジョウダカラ	Ⅰ-1-a	1oi																			
	ヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a	1dL,3u+il,1il,11(1c)ol,2f			1b,2f	5f	2b,10f		1b,2f			2,1u	1b,11f	1f		1f		2f			
	タルダカラ	Ⅰ-2-a								1f												
	ホシダカラ	Ⅰ-2-a	1ilc?				1f							1f								
	ヒメホシダカラ	Ⅰ-2-b																				
	ホシキヌタ	Ⅰ-2-a	10c,2dL,3il,2(e)ol,3f	1f		2f		1		1b												
	タカラガイ科不明												2f									
ウミウサギ科 Ovulidae																						
	ウミウサギ	Ⅰ-2-a	1ol				2f															
ヤツシロガイ科 Tonnidae																						
	ウズラガイ	Ⅰ-2-c	1,1mL,1f					1u		1f		1	1u									
	イワカワトキワガイ	Ⅱ-2-c								1f												

生息場所類型
Ⅰ：外洋-サンゴ礁域
Ⅱ：内湾-転石域
Ⅲ：河口干潟-マングローブ域
Ⅳ：淡水域
Ⅴ：陸域
Ⅵ：その他

0：潮間帯上部
1：潮間帯中・下部
2：亜潮間帯上縁部
3：干瀬
4：礁斜面及び下部
5：止水
6：流水
7：林内
8：林内・林縁部
9：林縁部
10：海浜部
11：打ち上げ物
12：化石

a：岩礁／岩盤
b：転石
c：礫／砂／泥底
d：植物上
e：淡水の流入する礫底

表１３　面縄第２貝塚出土貝類遺体の詳細組成（つづき－１）

科名	和名	生息場所類型	面縄第２貝塚2002A								面縄第２貝塚2002B											
			攪乱	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	SK-01	SK-02	SK-03	SK-04	SK-05	SK-06	SK-07	SK-08	SK-09	SK-10	SK-11	SK-13
フジツガイ科 Ranellidae																						
	サツマボラ	Ⅰ-2-a					1															
	シオボラ	Ⅰ-2-a					1bL		P													
	ホラガイ	Ⅰ-4-a		1b		1	1f		2f	1f		1f		1f								
オキニシ科 Bursidae																						
	イワカワウネボラ	Ⅰ-2-a					1		P													
	オキニシ	Ⅰ-3-a	14(1mL.1h).16(2e)b.9(1e)f	2b.1d.1ol.2f		3(1j)2b.2(1j)u	9b.3f	4.1b.1u.2f		4f		1b.1f	4b.1u.4f	3b.5f		1b.1f			1b.2f			1
	シロナルトボラ	Ⅰ-4-a						1b														
アッキガイ科 Muricidae																						
	テツレイシ	Ⅰ-1-a					1f															
	シラクモガイ	Ⅰ-3-a	9.1b.4u			P	2.1u	2.1u	P					1								
	ツノテツレイシ	Ⅰ-1-a				P		1f														
	ツノレイシ	**Ⅰ-3-a**	**3.1b.1u**			**1**	**2u.1f**	**1.1u**														
	テツボラ	Ⅰ-2-a	1h				1	1														
	ホソスジテツボラ	Ⅰ-1-a	1e																			
	レイシダマシ	Ⅰ-1-a	P																			
	コムラサキレイシダマシ?	Ⅰ-4-a	1e																			
	ウネレイシダマシ	Ⅰ-1-b	P				1															
	ハナワレイシ	Ⅰ-3-a	P																			
	ムラサキイガレイシ	Ⅰ-3-a				1																
	キマダライガレイシ	Ⅰ-3-a				1																
	アカイガレイシ	Ⅰ-3-a	7.1f			1		2														
オニコブシ科 Vasidea																						
	オニコブシ	Ⅰ-3-a	1b				1	1						1f								
	コオニコブシ	Ⅰ-2-a	5.3b.1u.7f			1.1u.4f	1u.4f	3.1b.2u.8f		2u.4f			2.1u.2f	1.1b.9f	1.2f	1.1f			1			
エゾバイ科 Buccinidae																						
	ノシガイ	Ⅰ-1-a						1														
	ホラダマシ	Ⅰ-2-a							1													
	スジクロホラダマシ	Ⅰ-3-a	1h				2		1													
オリイレヨフバイ(ムシロガイ)科 Nassaridea																						
	ミスジヨフバイ	Ⅰ-1-b					1															
イトマキボラ科 Fasciolaridae																						
	イトマキボラ	Ⅰ-2-b					1f		P										2f			
	ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a	4.6(1e)b.10(1h)u.4f	1u.1f	1ol	1.2u.2f	3b	1b.1u.2f	3f	1b.1f		1u	2b.9f	2b.4u.12f	1b	1f						
	リュウキュウツノマタ	Ⅰ-3-a	1.7b.1u.2f			1b.1u	1j.1bL.1b.1u.2f	1b.1u.1f		1u.1f			3u.3f	1b.8f					2u			1
	チトセボラ	Ⅰ-2-c	3.2b.10(1h)u.4f			1.2u	1		2f	2f								1				
ミノムシガイ(ツクシガイ)科 Costellaridae																						
	アラレオトメフデ	Ⅰ-3-a	1e																			
イモガイ科 Conidae																						
	マダライモ	Ⅰ-1-a	1e?			1	1	1		1												
	サヤガタイモ	Ⅰ-1-a	2(1c.1e).1ue	1u				2		1.2f			2f	3								
	ハナワイモ	Ⅰ-1-a	1																			
	キヌカツギイモ	**Ⅰ-2-a**				1j								1								
	イボシマイモ	**Ⅰ-2-a**		1f		1	2(1j).2f	8f														
	ハイイロミナシ	Ⅰ-2-a	1																			
	ヤナギシボリイモ	Ⅰ-3-a	2b			2f			3f					2f								
	サラサミナシ	Ⅰ-4-c												1								
	イタチイモ	Ⅰ-4-a					1															
	ツヤイモ	Ⅱ-2-c														1						
	ニシキミナシ	Ⅰ-2-c	1A				1f	1f					1f									
	シロアンボイナ	Ⅰ-2-c												1f								
	ミカドミナシ	Ⅰ-2-c					1f															
	クロザメモドキ	Ⅰ-2-c	1c		1																	
	アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c	2b.2u.1f			P	1f	P		2f						1f						
	クロフモドキ	Ⅰ-2-c	6b.5u.7f			1f		6f	12f				1u	6f								
	小形イモガイ		**1ue**							**2u**									**1**			
	中形イモガイ		5b				1u		1f	1f												
	大形イモガイ		1u																			
タケノコガイ科 Terebridae																						
	タケノコガイ	Ⅰ-2-c	1.1uc?																			
	ベニタケ	Ⅰ-2-c	2(1mL)			P	P															
	キバタケ	Ⅰ-2-c	1		1	1b	1															
カラマツガイ科 Siphnaridae																						
	コウダカカラマツ	Ⅰ-0-a								5.1f												
	ヒラカラマツ	Ⅰ-0-a					1															
軟体動物門／二枚貝綱（海産） Mollusca / Bivalvia (marine)																						
フネガイ科 Arcidae																						
	エガイ	Ⅰ-1-a	P	1/1		6/10	11/13.2f	3/7.1f					14.1u/14.2u	13/11	1/0	1/3			4/1			
	ベニエガイ	**Ⅰ-2-a**	**P**			4.3.1f	4/4.4f	5/0.1f					1/1	3/3								

表１３　面縄第２貝塚出土貝類遺体の詳細組成（つづき－２）

科名	和名	生息場所類型	面縄第2貝塚2002A								面縄第2貝塚2002B											
			撹乱	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	SK-01	SK-02	SK-03	SK-04	SK-05	SK-06	SK-07	SK-08	SK-09	SK-10	SK-11	SK-13
タマキガイ科 Glycymerididae																						
	ソメワケグリ	Ⅱ-2-c								1/1												
イガイ科 Mytilidae																						
	シロインコ	Ⅰ-2-a								0/1									0/1			
	リュウキュウヒバリ	Ⅰ-1-a	1/1,1u			0/1,1f	2j/1j	1/0.1f		1/1,4f			2/0	2/3.1f								
	ヒバリガイモドキ類	Ⅰ-1-a								1f												
ウグイスガイ科 Pteriidae																						
	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a						1/1		0/1												
	アコヤガイ	Ⅱ-2-b											1/0									
	クロチョウガイ	Ⅰ-4-a	1fA?				1/0	P					3f									
ハボウキ科 Pinnidae																						
	クロタイラギ	Ⅱ-4-c	1u/0						P													
シュモクアオリ科 Isognomonidae																						
	カイシアオリ類	Ⅱ-2-b	P	1/3.2f	1/2.1f	P	7/5	2/8.3f	P	2/2		4/4.4f		2u/1u,1f					1/0.1f			
ウミギク科 Spondylidae																						
	メンガイ類	Ⅰ-2-a	2e,1fe/2e,3fe				P		P				1f	1/0					0/1			
イタボガキ科 Ostreidae																						
	オハグロガキ	Ⅰ-1-a	2f/26	1/2.2f		1/1.1f	2/2.4f	1/1	P	1/1.2f			40/36	22/21.37f		0/1			3/3			
	ニセマガキ	Ⅰ-0-a	P					1f														
ツキガイ科 Lucinidae																						
	クチベニツキガイ	Ⅱ-2-b	P			P	1/0	1,1u/1		2cv												
	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	P							P			1/0						0/1			
	ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c					0/2	1/0		0/1												
キクザル科 Chamidae																						
	シマザル(ウナバラキクザル)	Ⅰ-2-a	1/0	1f																		
	キクザル類	Ⅰ-2-a	4e/0																			
ザルガイ科 Cardiidae																						
	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1/0			1/1	0/1															
	オキナワヒシガイ	Ⅱ-2-c				1/0																
シャコガイ科 Tridacnidae																						
	オオシラナミ	**Ⅰ-2-a**	**P**					**8,8u/10.5u,18f**		**3cv,5,1ud/2.8f**												
	ナガジャコ(トガリシラナミ)	**Ⅰ-2-a**	**P**			**1cv.3/11**	**3cv.0/1**	**1cv.1/0**		**1/0**			**2cv.2/2.1u**	**3/2**			**0/1**					
	シラナミ類	**Ⅰ-2-a**	**P**	**1.2u/1.2u,6f**	**2/0.2f**	**1cv.15.8u/11.8u,37f**	**12.6u/6.7u,36f**	**4/4**	**1/1**			**1cv.2,1u/1,4f**	**29.3u/23.6u,34f**	**2cv.36,1u/23,12u,53f**	**5/5.2f**	**2/1,1u,3f**	**0/1,1f**	**1/0.1f**	**1/0.5f**			
	ヒレジャコ	**Ⅰ-2-c**	**P**	**1/0.1f**		**3/3.2f**	**3/1**	**11/0.8f**	**1f**	**1/0**			**3.1u/2.1f**	**1.1u/3**	**1cv.0/1**	**1/0**	**2/3**					
	ヒメジャコ	**Ⅰ-2-a**	**P**	**P**	**P**	**P**	**P**	**P**		**1/0**												
	シャゴウ	**Ⅰ-2-c**	**P**	**P**		**P**	**P**	**P**	**P**													
バカガイ科 Mactridae																						
	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c				0/1																
チドリマスオガイ科 Mesodesmatidea																						
	イソハマグリ	**Ⅰ-1-c**	**P**	3/4		1/1	53/38	11/10.1f,1A		1.7u/6.9u		1/3	2.1u/7.1u	1cv.14/9		1/0		1/0	2/3	1/1	1f	
	ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c								0/2												
ニッコウガイ科 Tellinidae																						
	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c				1/0																
	サメザラ	Ⅰ-2-c	P	0/1u,3f		0/2.2f	2.1u/2.2u,9f	0/2.6f	P	1/1.2f		1.1u/0.3f	1.1u/0.7f	1/0.1f	1/0			1/0	1f			
	ゴシキザクラ	Ⅰ-2-b					1/1															
イソシジミ(シオサザナミ)科 Psammobiidae																						
	リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c	10(2j).8u/6.5u,22f	3f	1f	3/1.16f	2.1u/2u,7f	2/1.6f		2/1.5f		2/0.1f	3.2u/2.1u,11f	3.2u/4.3u,6f	1f	1f			2f			
シジミ科 Cyrenidae																						
	シレナシジミ	Ⅲ-0-c	P				1.1u/1.1u	2f		1/0.1f			1f/0									
マルスダレガイ科 Veneridae																						
	マルスダレガイ	Ⅰ-2-b						1/2														
	アラヌノメガイ	Ⅰ-3-c	P																			
	ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c	P			2/1													1/0			
	アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	P				2/0	0/2(1j)		1/0												
	ヒメイナミ(イナミガイ)	Ⅰ-1-c								1/0												
	ケショウオミナエシ	Ⅱ-2-c					0/1															
	マルオミエナシ	Ⅰ-2-c	P			1/0	0/1	1u/0														
海産貝類													25f	200f		39f		6f	27f			2f
軟体動物門/腹足綱(陸産) Mollusca / Gastropoda (terrestrial)																						
ヤマタニシ科 Cyclophoridae																						
	オオシマヤマタニシ	Ⅴ-8								3.1b												
キセルガイ科 Clausiliidae																						
	ヒルグチキセル	Ⅴ-7				1		1														
節足動物門/甲殻類(海産) Arthropoda / Crustacea																						
蔓脚類 Cirripedia																						
	タイワンクロフジツボ	Ⅰ-1-a	P	2f	1f	10f	6.7f	1.6f		2.4f			8.23f	15f	10f	1f			2f			
十脚類 Decapoda																						
	カニ類		1f																			

詳細　A：製品，B：焼け，b：体層，bL：体層背面欠，c：色彩残り/現代?，cv：合弁，d：死殻，dL：背面欠，e：磨滅，f：破片，H：人為的穿孔，h：オカヤドカリ宿貝，i：内唇，j：幼貝，mL：殻口欠，ol：外唇，P：確認，u：殻頂，二枚貝は，左／右．

3．面縄第２貝塚出土の人骨加工品（概報）

竹中正巳（鹿児島女子短期大学）

はじめに

鹿児島県大島郡伊仙町面縄第２貝塚の発掘調査が2002年に行われ、人骨を加工した製品が出土した。本稿では、その概要を報告する。本製品の詳細については、後日の面縄貝塚群の報告書に譲る。

（1）資料

人骨を加工した製品は、2002年に行われた面縄第２貝塚の発掘調査の際、A-2地区Ⅲ層から取り上げられた遺物で、遺物番号No.1293である。所属年代は縄文時代後期並行期（沖縄貝塚時代前Ⅳ期）と考えられている。

（2）人骨加工品の観察の概要

人骨加工品は長径が約26cmを測る（図32）。ヒトの右脛骨の一部と考えられ、骨体の前方部で、内側面から外側面に至る部分である。前縁を含んでいる。近位から遠位方向にかけての破折部分の緻密質や海綿質には、擦り磨いた痕跡が明瞭に認められる。本製品は未完成品であり、どのような用途のために加工したのか現在の所は不明である。

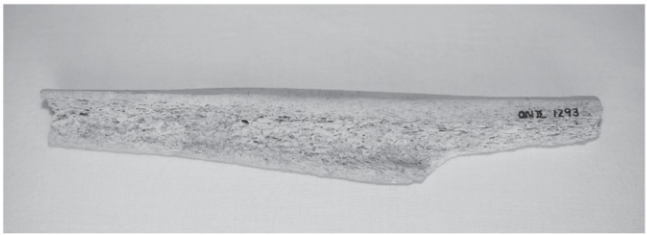


図３２　面縄第２貝塚出土の人骨加工品（ヒト右脛骨骨体部）

4．面縄第２・４・１貝塚出土土器の圧痕調査報告

小畑弘己（熊本大学文学部）・真邉　彩（鹿児島大学大学院）

（1）遺跡の調査と概要

遺 跡 名：面縄（おもなわ）第２・４・１貝塚
所 在 地：鹿児島県大島郡伊仙町面縄
調査期間：昭和 57 年（1972 年）10 月 4 日～ 11 月 9 日・昭和 59 年 11 月 12 日～ 12 月 9 日・平成 14 年（2002 年）11 月 5 日～ 12 月 31 日
担 当 者：牛ノ浜修・堂込秀人（昭和 57 年、昭和 59 年）・伊藤勝徳（平成 14 年度）
時　　期：縄文時代前期並行期（沖縄貝塚時代前Ⅰ期）～古代並行期（沖縄貝塚時代後Ⅳ期）
立　　地：面縄川が兼久浦に注ぐ袋状地形の隆起珊瑚礁の崖下および砂丘上（標約８ｍ）

（2）対象資料および調査法

①調査対象

圧痕調査の対象とした資料は、面縄第２・４・１貝塚から出土した縄文時代前期～古代並行期の土器および犬田布貝塚とヨヲキ貝塚の出土土器である。後二遺跡の出土土器（351 点・771 点）からは圧痕は検出できなかった。圧痕を検出した面縄貝塚の主要な土器型式は、第４貝塚が条痕文土器、面縄前庭式、第２貝塚が嘉徳式、第１貝塚が兼久式土器である。調査は破片資料から完形資料までを観察し圧痕を探す悉皆調査であり、平成 24 年２月 10・11 日の２日間実施した。

②レプリカ法の作業手順

本遺跡で行った圧痕調査および調査後の作業手順は、以下のとおりである。

１：肉眼および実体顕微鏡により土器圧痕部を観察し、植物・昆虫・貝等の圧痕の可能性があるものを抽出する。
２：圧痕部を水で洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。
３：離型剤（パラロイド B-75 5％アセトン溶液）を圧痕内部および周囲に塗布し、シリコーンゴム：㈱アグサジャパン製ブルーミックスソフトを圧痕部に充填する。
４：やや硬化したシリコーンゴムをマウント（走査型電子顕微鏡用ピンタイプ試料台使用）に盛り、圧痕部と接合して硬化させる。
５：硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。
６：作成したレプリカを走査型電子顕微鏡（日本電子製 JCM-5700 型）で観察・撮影し、同定する。
７：レプリカの計測は、デジタルマイクロスコープ（キーエンス社製 VHX-1000）で行った。

（3）調査結果（図 33 ～ 34、表 14）

観察した資料は総計 3,858 点である。うちレプリカを作成したのは第 2 貝塚 12 点、第 4 貝塚 5 点、第 1 貝塚 1 点であり、そのうち植物・昆虫の圧痕の可能性があるものは第 2 貝塚 7 点、第 4・1 貝塚がそれぞれ 1 点であった。同定結果および計測値は表のとおりである。本報告では種不明なものも全て提示しており、大方のご教示を請うものである。

表 14　面縄第 2・4・1 貝塚検出圧痕一覧表

図	番号	遺跡名	資料番号	注記	型式/時期	器形	部位	検出面	圧痕の種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
33	1	面縄第 2 貝塚	ON Ⅱ 0001-1	ON Ⅱ 1346	面徳式	深鉢	胴部	内面	不明種子果皮	4.8	4.7	3.4※
	1		0001-2						コクゾウムシ属甲虫	3.8※	1.4	1.2
	2	面縄第 2 貝塚	ON Ⅱ 0002	ON Ⅱ 1331	面徳式	深鉢	胴部	外面	不明種子	5.3	3.2	2.7
	3	面縄第 2 貝塚	ON Ⅱ 0009	ON Ⅱ カク層0073	面徳式	深鉢	胴部	内面	コクゾウムシ属甲虫	4.5	1.3※	1.1※
	4	面縄第 2 貝塚	ON Ⅱ 0010	ON Ⅱ 二九	面徳式	深鉢	底部	外面	コクゾウムシ属甲虫	3.9※	1.2※	0.9※
34	5	面縄第 2 貝塚	ON Ⅱ 0011	ON Ⅱ 一五	面徳式	深鉢	底部	外面	コクゾウムシ属甲虫	3.6※	1.2	1.1※
	6	面縄第 4 貝塚	ON Ⅳ 0003	ON-B3 Ⅲ	条痕文	深鉢	胴部	断面	不明種子	3.0※	1.2	1.3
	7	面縄第 4 貝塚	ON Ⅳ 0004	ON 134	面縄前庭	深鉢	底部	外面	不明種子果皮	15.2	8.6	1.3※
	8	面縄第 1 貝塚	ON Ⅰ 0001	ON A-11 3貝	兼久	深鉢	胴部	外面	コクゾウムシ属甲虫	2.7※	1.1※	1.2※

※は欠損のため全長不明

コクゾウムシ属甲虫（図 33：1-2・3・4、図 34：5・8）

残存長 3mm ほどの細長い甲虫群である。丸い頭部と細長い流線型の前胸部・翅鞘部が観察できる。前胸背および翅鞘にはほぼ円形の点刻があり、翅鞘には強く点刻された条溝がある。列間部は条溝よりも幅が広い。図 33：4（ON Ⅱ 0010）の個体にみられるように、腹節間の 3 本ほどの深い条溝が特徴的で、第五腹節は尖り気味で腹側に湾曲する。そのほとんどはレプリカでは復元できていないが、本来であれば 1mm ほどの長い口吻がのびている。図 34：5（ON Ⅱ 0011）は口吻先端部のみレプリカで復元できている。*Sitophilus* 属甲虫のうち、圧痕はその特徴と大きさから、コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky と思われるが、厳密には小楯板の形状や触覚によってココクゾウムシ *Sitophilus oryzae* と区別されねばならない（吉田ほか 2001）。しかし、本資料群は口吻や触覚部分が不完全なレプリカであり、さらに背面部の圧痕も小楯板部分は表面が粗く、判断ができない。ただし、その体部の大きさから推定が可能である。図 33：1-2（ON Ⅱ 0001-2）の前胸長は 1.41mm、上翅長は 1.93mm、33：3（ON Ⅱ 0009）の前胸長は 1.27mm、上翅長は 1.72mm、図 34：5（ON Ⅱ 0011）の前胸長は 1.33mm、上翅長は 1.93mm であり、全国のコクゾウムシ属圧痕の前胸長平均 1.29mm と上翅長平均 1.83mm とほぼ同じである。また、三内丸山遺跡で小楯板からコクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky と同定できた個体（SNM 0194）の大きさ（前胸長 1.45mm、上翅長 1.88mm）ともほぼ同じである。これに対し、現生マレーシア産のココクゾウムシ *Sitophilus oryzae*10 個体の平均は前胸長 0.88mm、上翅長 1.15mm、食品総合研究所サンプル 20 個体の場合でも、平均前胸長 1.08mm、平均上翅長 1.38mm であり、圧痕の場合 1 割ほど縮小している（小畑 2011）ことを考えると、

本遺跡検出のコクゾウムシ属圧痕の大きさは現生ココクゾウムシより 1.3 ～ 1.4 倍ほど大きく、コクゾウムシに近いといえる。しかし、より詳細な検討を経た上で最終的な結論を下すこととし、ここではコクゾウムシ属としておく。

不明種実（図 33：1-1・2、図 34：6・7）

図 33：1-1（ON Ⅱ 0001-1）は直径 5mm ほどの半裁された種子の果皮である。形状はミズキ果実にるが、種は不明である。果皮の厚さは 0.6mm ほどである。

図 33:2（ON Ⅱ 0002）は長さ 5mm ほどのラグビーボール形をした種子である。先端が尖り、断面形は角のとれた五角形をなす。種は不明である。

図 34：6（ON Ⅳ 0003）は長さ 3 ～ 4mm ほどの長紡錘形をした種子と思われるものである。小さく尖る先端部がつく。断面形は円形である。

図 34：7（ON Ⅳ 0004）は長さ 15mm ほどの平面形が柿の種に似た果皮である。果皮の厚さは 0.6mm ほどである。堅果類の果皮とも考えられるが、形状がシンメトリーでないことや断面形がやや平坦であることなどから、ここでは不明種実の果皮としておく。

（4）圧痕調査の成果とその意義

今回の圧痕調査では、不明種実 4 点、コクゾウムシ属甲虫 5 点の圧痕を検出した。今回、徳之島においてはじめてコクゾウムシ属甲虫の圧痕を検出できたことは大きな意義があろう。コクゾウムシ属甲虫圧痕は、2012 年 12 月末の時点で 36 遺跡 155 例（本遺跡群の検出例を含む）が確認されており（小畑 2014）、最古のものは鹿児島県西之表市三本松遺跡における縄文時代早期前葉の吉田式土器の例であった（Obata et al. 2011）。検出例の大半は九州地方であり、その数は 34 遺跡 116 例（小畑・真邉 2013）にのぼる。最近では、時期は新しくなるが沖縄県伊江島でも検出され（木下編 2013）、北海道南部でも検出されていることから、ほぼ日本列島各地で検出されていることになる。本遺跡例は、縄文時代後期後半（嘉徳式）4 例と古墳時代～古代（兼久式）1 例である。

かつてこのコクゾウムシ属甲虫の圧痕は稲作伝播の指標とされていたが、現在ではドングリ・クリなどの堅果類といった植物性の乾燥貯蔵食物を加害していたと想定されており、縄文時代の早い時期にすでに家屋害虫化していたと考えられている（Obata et al. 2011，小畑 2011・2012）。本遺跡群の例は三本松遺跡例やナガラ原東貝塚例とともに、これら甲虫が鹿児島県南部の大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島に約 10000 年前から古代まで生息していた可能性を示した点で意義がある。この南西諸島におけるコクゾウムシ属甲虫圧痕の評価については、遺跡中および昆虫圧痕中での高い出現比率などから、九州以北の縄文時代の検出例の場合と同じであったと考えられる。このコクゾウムシ属圧痕が発見されている時代は、南西諸島においてはまだ稲作が伝来していない時期であり、その加害対象物は堅果類などの他の乾燥デンプン質食料であった可能性が高い。本遺跡においても、コナラ属種実の殻と思われるものは、図 34：7 がある。さらにナガラ原東貝塚においても多数の果皮が圧痕として検出されており、類例の少なさから今後の課題とされているが、コクゾウムシ属甲虫とドングリ類との関係が想定されている（木下編 2013）。

さらに、ここから派生する問題は、①在来種として島に隔離された集団が害虫としてそれぞ

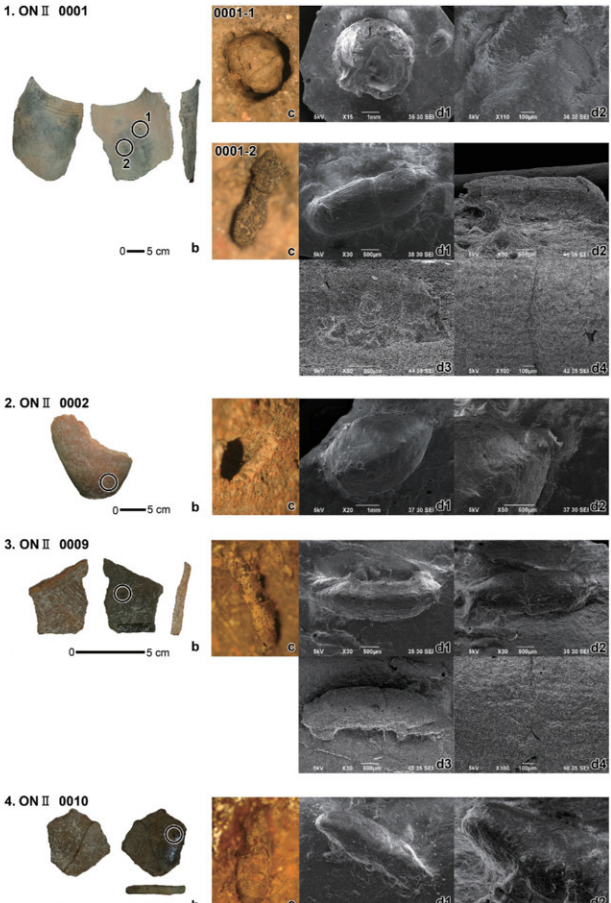


図３３　面縄貝塚土器圧痕・レプリカ SEM 画像１

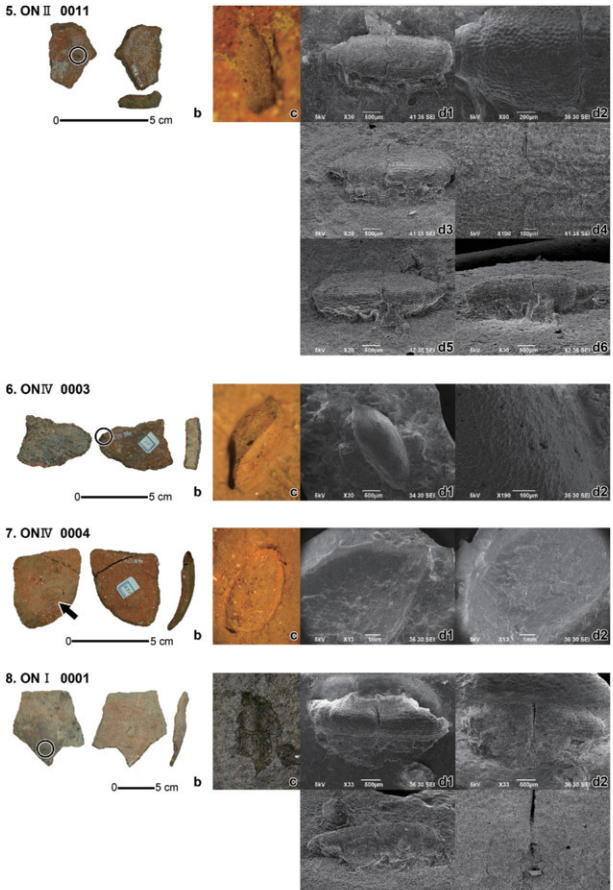


図34　面縄貝塚土器圧痕・レプリカ SEM 画像2

れの島で進化したものなのか、②人間の手によって食物とともに拡散したものなのか、という点である。彼らがすでに現代コクゾウムシと同じ生態をもっていたとすると、数キロの距離でも人為的な運搬が必要であり、飛翔による海を越えた遠距離拡散は難しい（吉田ほか 1956）。②の「人為的な食料運搬と害虫の拡散説」であれば、島嶼を超えた食料運搬の存在と、交易品目としての乾燥貯蔵食料の存在を示唆する傍証であり、今後、この仮説の真偽の検証を含めて、本地域におけるコクゾウムシ属圧痕の動向には注意を払う必要があろう。

本調査には、小畑が研究代表者として受けている平成 24・25 年度日本学術振興会科学研究費研究補助金：基盤研究 A「先端技術を用いた東アジアにおける農耕伝播と受容過程の学際的研究」（課題番号：24242032）の一部を使用した。

＜引用参考文献＞

小畑弘己 2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』. 310 頁. 同成社

小畑弘己　2012「イネを食べなかった縄文時代のコクゾウムシ　－稲作は日本にいつ伝播したのか？－」『東アジア植物考古学の革新』第 13 回国際花粉学会議・第 9 回国際古植物会議公開シンポジウム発表要旨集 pp.13-24

小畑弘己　2014「三内丸山遺跡からみた貯蔵食物害虫 *Sitophilus* 属の生態と進化過程の研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』17. 76 － 85 頁. 青森県教育委員会

小畑弘己・真邉　彩　2013「水天向遺跡出土土器の圧痕調査報告」『水天向遺跡 2』. 鹿児島県薩摩郡さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）. 49 － 52 頁

木下尚子編　2013『ナガラ原東貝塚の研究－ 5 世紀から 7 世紀前半の沖縄伊江島』. 平成 21 ～ 24 年度科学研究費補助金基盤研究 A 研究成果報告書. 390 頁. 熊本大学文学部

吉田敏治・玉村芳信・河野謙二・高橋幸一・宅万敏和・島原壽夫　1956「コクゾウの詩花について」『宮崎大学学芸部研究時報』1-2. 137 － 178 頁.

吉田敏治・渡辺　直・尊田望之　2001『図説　貯蔵食品の害虫』. 268 頁. 全国農村教育協会

OBATA H., MANABE A., NAKAMURA N., ONISHI T. and SENBA Y. 2011　A New Light on the Evolution and Propagation of Prehistoric Grain Pests: the World's Oldest Maize Weevils Found in Jomon Potteries, Japan. 電子科学ジャーナル PLoS ONE（http://www.plosone.org/article/info%3Adoi%2F10.1371%2Fjournal.pone.0014785）

5．面縄第2貝塚出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

（1）試料と方法

試料名	地　点	種　類	前処理・調整	測定法
No.1	SK01：北西 1/4・中位覆土	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄	AMS
No.2	SK02：M1 層	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄	AMS
No.3	SK08：b-7，M1 最下層	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄	AMS
No.4	SK08：b-9 最下層	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄	AMS
No.5	SK08：c-7 最下層	炭化材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄	AMS

※1）AMS は加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

（2）測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 （年 BP）	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C 年代 （年 BP）	暦年代（西暦）
No.1	192583	3380 ± 40	-26.4	3360 ± 40	交点：cal BC 1650 1 σ：cal BC 1690 ～ 1610 2 σ：cal BC 1740 ～ 1530
No.2	192584	3530 ± 40	-27.8	3480 ± 40	交点：cal BC 1760 1 σ：cal BC 1880 ～ 1740 2 σ：cal BC 1900 ～ 1690
No.3	192585	3510 ± 40	-26.8	3480 ± 40	交点：cal BC 1760 1 σ：cal BC 1880 ～ 1740 2 σ：cal BC 1900 ～ 1690
No.4	192586	3410 ± 40	-26.6	3380 ± 40	交点：cal BC 1680 1 σ：cal BC 1720 ～ 1620 2 σ：cal BC 1750 ～ 1540
No.5	192587	3440 ± 40	-26.9	3410 ± 40	交点：cal BC 1700 1 σ：cal BC 1750 ～ 1670 2 σ：cal BC 1770 ～ 1620

①^{14}C 年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C 比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

②δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

③補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

④暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68％確率）と2σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

6．面縄第2貝塚における樹種同定

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（2）試料

試料は、面縄第２貝塚より出土した炭化材21点である。時期は縄文時代後期並行期（沖縄貝塚時代前Ⅳ期）である。

（3）方法

試料を割折して、新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結果

結果を表15に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マメ科？　Leguminosae?　図35－1

横断面：年輪のはじめに大型道管が配列する環孔材である。晩材部では、小道管が単独および放射方向に数個複合し、木部柔組織が小道管を包む。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のみ直立細胞である。１～４細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりマメ科と思われるが、試料が小片であり広範囲の観察が困難であったため、同定には至らなかった。なおマメ科には、ジャケツイバラ属、クララ属、イヌエンジュ属、デイゴ属、ネムノキ属などがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。

カキノキ属　*Diospyros*　カキノキ科　図35－2

横断面：中型から大型の道管が、単独および２～３個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の壁は厚い。柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅で、層階状に配列する傾向を示す。

以上の形質よりカキノキ属に同定される。カキノキ属には、トキワガキ、リュウキュウガキ、マメガキ、リュウキュウマメガキなどがあり、本州（西部）、四国、九州、沖縄に分布する。

ムラサキシキブ属？　*Callicarpa?*　クマツヅラ科　図35－3

横断面：小型の道管が、放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～２細胞幅である。直立細胞からなる単列部が長い。

以上の形質よりムラサキシキブ属？に同定される。ムラサキシキブ属には、ムラサキシキブ、オオシマムラサキ、コムラサキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。

環孔材　ring-popous wood

横断面：部分的ではあるが、年輪のはじめに大型の道管が配列する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。試料が非常に小片で、広範囲の観察ができなかったため、環孔材の同定にとどめた。

散孔材　diffuse-porous wood

横断面：部分的ではあるが、小型の道管が散在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在することがかろうじて確認できた。

以上の形質より散孔材に同定される。試料が非常に小片で、広範囲の観察ができなかったため、散孔材の同定にとどめた。

広葉樹　broad-leaved tree

横断面：部分的ではあるが、道管が存在する。

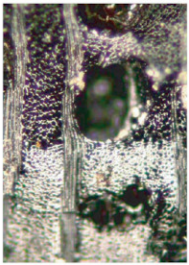
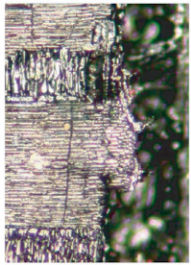
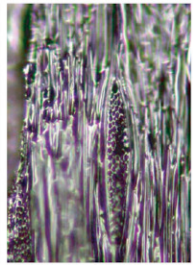
放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。試料が非常に小片で、広範囲の観察ができなかったため、広葉樹の同定にとどめた。

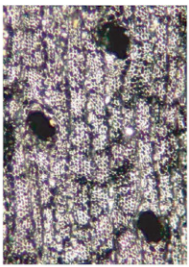
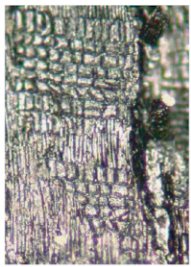
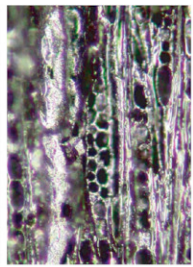
（５）所見

同定の結果、面縄第２貝塚出土の炭化材は、マメ科？８点、カキノキ属１点、ムラサキシキブ属？４点、環孔材２点、散孔材４点、広葉樹２点であった。カキノキ属は、当時の遺跡周辺に自生していたと推定される。同定には至らなかったが、マメ科？とムラサキシキブ属？も遺跡周辺に自生していた可能性が考えられる樹種である。

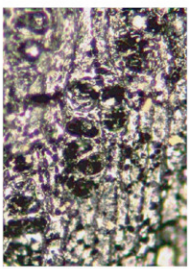
横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

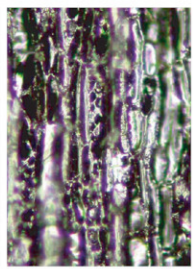
1．SK08 M1 a11～15　マメ科？

横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

2．1045のシャコ貝内遺物　カキノキ属





横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

3．SK08 b7 M1　ムラサキシキブ属？

図35　面縄第２貝塚の炭化材

表１５　面縄第２貝塚における樹種同定結果

試料	遺構・層位等			結果（学名／和名）	
1	SK-01	北西1/4	中位埋土層	Leguminosae?	マメ科？
2	SK-05		完掘時埋土上層～5cm下	broad-leaved tree	広葉樹
3	SK-06		埋土0～5cm	diffuse-porous wood	散孔材
4	SK-08	b-3		Leguminosae?	マメ科？
5	SK-08	b-6	検出面	*Callicarpa*?	ムラサキシキブ属？
6	SK-08	b-7	M1 最下層	diffuse-porous wood	散孔材
7	SK-08	b-7	遺構プラン検出面	Leguminosae?	マメ科？
8	SK-08	b-8	M1 最下層	diffuse-porous wood	散孔材
9	SK-08	b-9	最下層	Leguminosae?	マメ科？
10	SK-08	b-9	2nm M1	broad-leaved tree	広葉樹
11	SK-08	b-10	最下層	*Callicarpa*?	ムラサキシキブ属？
12	SK-08	b-15	M1	diffuse-porous wood	散孔材
13	SK-08	c-7	M1 最下層	*Callicarpa*?	ムラサキシキブ属？
14	SK-08	c-7	遺構プラン検出面	Leguminosae?	マメ科？
15	SK-08	c-8	M1 最下層	*Callicarpa*?	ムラサキシキブ属？
16	SK-08	c-9	M1 最下層	ring-popous wood	環孔材
17	SK-08	c-10	M1	Leguminosae?	マメ科？
18	SK-08	c-13	グリッド層	Leguminosae?	マメ科？
19	SK-08	d-11	M1	ring-popous wood	環孔材
20	SK-08		M1 a11～a15	Leguminosae?	マメ科？
21	1045のシャコ貝内遺物			*Diospyros*	カキノキ属

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造．文永堂出版．p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造．文永堂出版．p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣．p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別第１号．植生史研究会．p.242

７．面縄第２貝塚における種実同定

株式会社古環境研究所

（１）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存している場合がある。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

（２）試料

試料はいずれも水洗選別されたもので、SK-01 北西 1/4 中位埋土層・南東 1/4 中位埋土層の２点、SK-05 完堀時埋土上層～５cm 下の２点、SK-07M1 層の３点、SK-08 ｂ - ５区 M1 層の３点、SK-08 ｂ - ９区 M1 最下層６点、SK-08 ｃ - ７区 M1 最下層５点の計 22 点である。

（３）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（４）結果

分類群

樹木１分類群が同定された。学名、和名および粒数を表 16 に示し、主要な分類群を図 36 に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

エノキ　Celtis sinensis var. japonica　核　ニレ科

黄褐色ないし淡褐色で球形を呈す。基部に白色の突起を持つ。

表１６　面縄第２貝塚遺跡における種実同定結果

分類群		部位	SK-01		SK-05		SK-07			SK-08		
			北西1/4	南東1/4	完堀時埋土					b-5区		
学名	和名		中位埋土層	中位埋土層	上層～5cm下①	上層～5cm下②	M1層①	M1層②	M1層③	M1層①	M1層②	M1層③
Arbor	樹木											
Celtis sinensis Pers. *var. japonica*	エノキ	核		2	2							
Total	合計		0	2	2	0	0	0	0	0	0	0
	備考								以上 合5			合+

分類群		部位	SK-08													
			b-5区			b-9区						C-7区				
学名	和名		M1層①	M1層②	M1層③	M1最下層①	M1最下層②	M1最下層③	M1最下層④	M1最下層⑤	M1最下層⑥	M1最下層①	M1最下層②	M1最下層③	M1最下層④	M1最下層⑤
Arbor	樹木															
Celtis sinensis Pers. *var. japonica*	エノキ	核														
Total	合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	備考				合+											

（5）まとめ

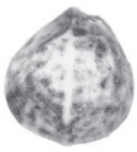
面縄第２貝塚遺跡より出土した種実遺体の同定を行った。その結果、SK-01 北西 1/4 中位埋土層と SK-05 完堀時埋土上層～５cm 下よりエノキ核がわずかに検出された。エノキ属は二次林要素でもある。なお SK-07M １層、SK-08 b -5M1 層、SK-08 b -15M1 層より巻貝、二枚貝、動物骨破片などもみられた。

参考文献

笠原安夫（1985）「日本雑草図説．養賢堂．494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業．雄山閣　出版．p.131 － 139.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ．雄山閣出版株式会社．p.165 － 174.
南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナル No.355．ニューサイエンス社．p.18 － 22.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編．第四紀試料分析法．東京大学出版会．p.276 － 283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355．ニューサイエンス社．p. 2 － 14.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣．187p.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No.409．ニューサイエンス社．p.15 － 19.

1．ＳＫ-01 北西1/4
中位埋土層 エノキ核

1.0mm



2．ＳＫ-05 完堀時埋土
上層～5cm下 エノキ核

1.0mm

3．ＳＫ-08 b-5 M1層

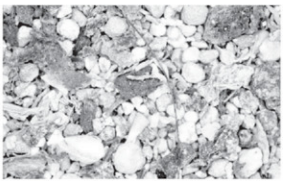
10mm

4.5.6．ＳＫ-07 M1層

10mm　10mm　10mm

7.8．ＳＫ-08 b-15 M1層

0.5mm

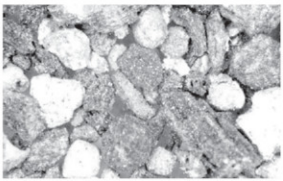


9．ＳＫ-01 南東1/4 下位埋土層

2.0mm

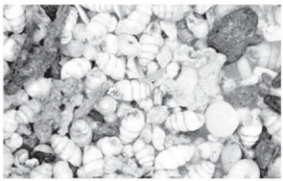
10．ＳＫ-01 北西1/4 中位埋土層

2.0mm



11．ＳＫ-08 b-9 M1最下層

1.0mm



12．ＳＫ-08 b-15 M1層

2.0mm

図36　面縄第2貝塚の種実

第Ⅵ章
総　括

第Ⅵ章　総括

1．面縄第２貝塚の概要

面縄第２貝塚は、鹿児島県大島郡伊仙町面縄西兼久に所在する遺跡である。本遺跡は、面縄小学校の敷地周辺、サンゴ礁の礁池に面した標高８ｍ前後の砂丘上にあり、付近に面縄川が流れる自然環境内に位置する。本遺跡は、戦前の調査によって存在が知られ、伊仙町教育委員会による 1983 年の調査では、住居跡の可能性がある敷石遺構の一部が発見された。一連の調査で出土した土器は、沖縄本島の伊波式、荻堂式との関連が指摘され（大山・小原 1933）、河口貞徳による嘉徳Ⅰ式、Ⅱ式に該当すると報告されている（牛ノ浜・堂込編 1985）。これらはいずれも縄文時代後期並行期に位置付けられており、琉球列島における土器編年上では沖縄貝塚時代前Ⅳ期に相当する。

2．面縄小学校改築に伴う 2001 年度確認調査、2002 年度緊急調査の成果

2001 年度の確認調査では、遺物を包含する２枚の砂層（Ⅱ層とⅤ層）と集石遺構が確認され、小学校校舎の東半に複数の遺構面が包蔵されていることが明らかとなった。

2002 年度の緊急調査では、敷石遺構（ＳＫ－０１）、炉跡とみられる集石（ＳＫ－０７、ＳＫ－０８、ＳＫ－１２、ＳＫ－１３）、住居跡の可能性がある素掘りの竪穴状遺構（ＳＫ－０２、ＳＫ－０３、ＳＫ－０４、ＳＫ－０５、ＳＫ－０６、ＳＫ－０９）、土坑（ＳＫ－１０、ＳＫ－１１）、ピット群が検出され、これらに伴って土器、貝製品、骨製品、石器、自然遺物が得られた。緊急調査の結果、複数の遺物包含層の堆積が確認され、遺構の検出

図３７　各層検出の遺構の配置

表１７　面縄第２貝塚 2002 年度調査での土器出土状況

群	Ⅰ		Ⅱ																	Ⅲ	
類			A								B						C				
大分類	A	B	1		2		3		4		1	2	3	4	5	6	1	2		A	B
小分類			①	②	①	②	①	②	①	②											
攪乱	3	2	1	1	11	10	6	5	40 (12)	5	8	4	2	4	6	3	10 (4)			2 (2)	4 (3)
Ⅰ層	1					1 (1)			5 (4)								1 (1)				1 (1)
Ⅱ層	1						2 (2)						1 (1)	1						1 (1)	
SK07									3					2 (1)		1				1	
SK08													1	1			1 (1)				
Ⅲ層		1			5 (3)	3 (1)	5 (5)	2 (2)	21 (12)		3 (1)	8 (5)	1	14 (11)	1	1	3 (3)	2 (1)			
SK02							2 (1)		1								1 (1)				
SK05									1			2									
SK06					3	1			4 (3)												
Ⅳ層		6			6 (5)	5 (2)	12 (10)		23 (17)		3 (3)	10 (8)	2	2 (1)				1 (1)			
Ⅴ層	1	2			4 (2)	4 (2)		1 (1)	12 (7)		1	2 (2)					2 (1)	1 (1)			
SK03	4			1	3		2		24 (24)		2 (2)	7 (7)		6							
SK04									4												
Ⅵ層									4 (3)		1	4 (3)									
Ⅶ層					5 (4)	3		1	13 (9)												

（）：うち口縁端部を残さないもの

状況から調査区内には少なくとも以下に示す５期の遺構面が存在していたと想定される（図37）。

第１期（Ⅶ層）：調査区内では遺構無し
第２期（Ⅵ層）：ＳＫ－０３、ＳＫ－０４、ＳＫ－１２
第３期（Ⅴ層）：ＳＫ－１０、ＳＫ－１１
第４期（Ⅳ層）：ＳＫ－０２、ＳＫ－０５、ＳＫ－０６、ＳＫ－１３
第５期（Ⅲ層）：ＳＫ―０１、ＳＫ―０７、ＳＫ－０８、ＳＫ－０９、ピット群

以上の状況は、本遺跡での堆積状態および遺構の包蔵状況が極めて良好であることを示しており、調査区外に延びている遺構も複数存在することから、面縄小学校の敷地内に本遺跡の一部が残存している可能性は非常に高いと推定される。

３．出土遺物の特徴

出土遺物は、土器が最も多く、それに加え貝製品、骨製品、石器および多量の自然遺物が出土している。

土器は、甕と壺があるが、甕が大半を占める。甕類は施文部位と施文帯の区画方法から３つの群に分類されたが、文様別の出土状況を確認してみると（表17）、上層ほど施文方法が多様化、複雑化していく状況が看取される。

貝製品はサンゴ礁域に生息する貝類の利用が圧倒的多数を占めており、骨製品も猪骨を素材とするものが多い。これら製品の素材は、ほとんどが自然遺物としても得られており、それらの大半は島内で獲得可能な食糧資源を製品素材として利用していたと理解される。

４．自然科学的分析の成果

ピックアップによって取り上げた貝類遺体と脊椎動物遺体は専門家に鑑定を依頼し、同定個体数の算出によって現段階における暫定的な組成表を作成した。貝類遺体は、サンゴ礁域の中大形種が多く、沖縄諸島の沖縄貝塚時代後期遺跡の状況と類似する。また、脊椎動物遺体はイノシシとサンゴ礁魚類を主体に、ウミガメ類、海獣類が加わる組成であり、奄美、沖縄両諸島における先史時代遺跡の普遍的特徴が認められた。

Ａ－２地区Ⅲ層で出土した人骨には明瞭な研磨痕が遺されており、未成品ながら何らかの加工品である可能性が指摘された。今後類例資料との比較が必要である。

出土した土器の圧痕調査では、コクゾウムシ属甲虫の圧痕が確認され、堅果類などの乾燥デンプン質食糧が加害の対象であった可能性が想定されている。その他の種実の種は不明であった。

分析を依頼した５点の炭化物はすべてBC1700年前後の年代が測定され、比較的安定した測定結果が得られた。炭化材の同定結果は、マメ科？、カキノキ属、ムラサキシキブ属？、環孔材、散孔材、広葉樹であり、また、種実としてはエノキ核がわずかに出土している。

５．遺跡の残存状況と今後の課題

以上、面縄小学校に伴う緊急調査により、本遺跡は戦前に発見された面縄第２貝塚の西半部に当たり、その包蔵状態は極めて良好であったと判断される。また、調査区外に延びた遺構が存在することに加え、伊仙町教育委員会が2007年度から進めている確認調査によっても小学校校庭の東側およびその隣接地において表掘りの竪穴遺構や集石遺構が検出されていることから、周辺には本遺跡の一部が残存している可能性は非常に高い。

緊急調査による調査区断面の観察によると、遺跡を形成する複数枚の砂層が複雑に堆積している状況も看取され、重なり合う砂層に掘り込まれた遺構群を面的に検出するには、旧地形の復元的発掘を進めながら遺構面を精査することが肝心であり、これからの調査ではよりいっそうの注意と調査方法の確立を要する。また、砂丘の堆積過程およびサンゴ礁形成過程の自然科学的分析を積極的に進め、人類の生活と環境との対応関係を探る試みも今後必要となるであろう。

なお、本遺跡の包含層（Ⅱ～Ⅶ層）からも比較的多くの遺物が出土している。本報告では紙幅の都合により遺構に伴う遺物の掲載に留めたが、これらの詳細は機会を改めて報告していき

たい。

最後に、本遺跡の発掘調査と報告書作成に携わられたすべての方に感謝申し上げる。

参考文献

大山柏・小原一男　1933「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物(第１回)＝面縄第二貝塚＝伊波式土器の研究」『史前学雑誌』５巻５号

牛ノ浜修・堂込秀人(編)　1985「面縄貝塚群」伊仙町埋蔵文化財調査報告書(４)　伊仙町教育委員会

図　版

図版 1

1．作業風景（1）

2．作業風景（2）

3．遺構面の精査

4．遺構検出作業

5．遺構の実測

6．調査区の測量

7．遺物出土状況（1）

8．遺物出土状況（2）

1．a 面断面

2．b 面断面

3．c 面断面

4．SK-01 近景（南西より）

5．SK-02 近景（西より）

6．SK-03 近景（西より）

7．SK-04 近景（南より）

8．SK-05 近景（西より）

1. SK-06近景（北西より）

2. SK-07近景（北より）

3. SK-08近景（南東より）

4. SK-09近景（東より）

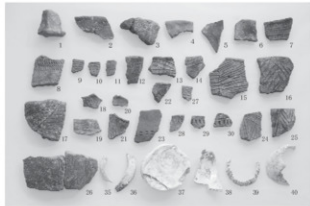
5. SK-10・11近景（北東より）

6. SK-12近景（北より）

7. SK-13近景（東より）

8. ピット群近景（南より）

1．確認調査１トレンチ出土遺物（番号は図７の遺物番号に対応）



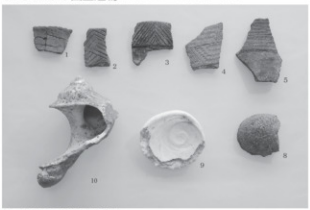
2．確認調査６トレンチ出土遺物（番号は図８の遺物番号に対応）

3．SK-01、SK-06、SK-07、SK-11出土遺物

4．SK-02出土遺物（番号は図 14 の遺物番号に対応）

5．SK-03出土遺物（番号は図 15 の遺物番号に対応）

6．SK-04出土遺物（番号は図 18 の遺物番号に対応）



7．SK-05出土遺物（番号は図 20 の遺物番号に対応）

8．SK-08出土遺物（番号は図 26 の遺物番号に対応）

報告書抄録

ふりがな	おもなわかいぢかぐん
書名	面縄貝塚群Ⅱ
副書名	面縄小学校改築に伴う面縄第２貝塚の緊急調査
シリーズ名	伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第１５号
編著者名	新里亮人(編)　小畑弘己　株式会社古環境研究所　黒住耐二　竹中正巳　樋泉岳二　真邊　彩
編集機関	伊仙町教育委員会（伊仙町立歴史民俗資料館）
所在地	〒891－8201　鹿児島県大島郡伊仙町伊仙2945-3　TEL　0997－86－4183　FAX　0997－86－4184
発行年月日	2014年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
おもなわだいにかいづか 面縄第２貝塚	かごしまけんおおしまぐんいせんちょう 鹿児島県大島郡伊仙町 おおあざおもなわあざにしかねく 大字面縄字西兼久	46532	40-29	27°40′23	128°57′53	20021101 ～ 20021231	610㎡	緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
面縄第２貝塚	集落跡	縄文時代後期並行期(沖縄貝塚時代前Ⅳ期)	敷石遺構、集石遺構、竪穴遺構	土器、貝製品、骨製品、石器、貝類遺存体、脊椎動物遺体等	海岸砂丘上に立地する縄文時代後期並行期(沖縄貝塚時代前Ⅳ期)の集落跡が複数面確認され、各種遺構から、土器、貝製品、骨製品、石器等が比較的多く検出された。

要約

面縄貝塚群は、縄文時代前期並行期(沖縄貝塚時代前Ⅰ期)から中世並行期の遺跡である。遺跡は、昭和５年に発見され、これまでの調査によって琉球列島における土器編年の基礎となる資料が多く得られている。発見以来から貝塚名称が付せられているが、これまでの調査からは住居跡、集石遺構、石棺墓などが発見されており、遺跡が貝塚、居住域と墓域によって構成されていることが明らかとなっている。

昭和７年に発見された面縄第２貝塚は、戦前と奄美群島本土復帰直後における調査の結果、貝殻を多く含む包含層の存在が知られていた。その後、伊仙町教育委員会の確認調査の結果、縄文時代後期並行期(沖縄貝塚時代前Ⅳ期)に相当する集石遺構の一部が確認された。2001年度の面縄小学校改築に伴う確認調査の結果、校庭内にも同時期の遺跡が包蔵されていることが明らかとなった。その翌年に実施された学校改築に伴う緊急調査の成果が本報告の主な内容である。

緊急調査の結果、遺物を僅かに包含する3枚の白砂を間層に挟んだ状態で３枚の遺物包含層が確認され、それぞれの白砂中から複数の遺構が検出された。発見された遺構は、敷石遺構、集石遺構、竪穴状遺構があり、遺構の包蔵状態と砂丘の堆積状況は極めて良好な状態であることが明らかとなった。これらの遺構群の一部は、調査区外に遺されていることは間違いなく、新築された面縄小学校校舎の東側と南側にはその他の遺構が良好な状態で包蔵されている可能性は非常に高いと判断された。

出土した貝類遺体の分析の結果、サンゴ礁域の貝類が卓越し、中でもシャコガイやヤコウガイなど大型の貝類が多くを占めることが明らかとなった。魚類もサンゴ礁域に生息する種が多かった。放射性炭素年代では、BP3400年前後の結果が得られており、本遺跡の形成時期を考える上で重要な成果が得られた。

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

面縄貝塚群Ⅱ

面縄小学校改築に伴う面縄第２貝塚の緊急調査

編集・発行　伊仙町教育委員会（伊仙町立歴史民俗資料館）
〒891-8201　鹿児島県大島郡伊仙町伊仙2945-3
TEL　0997-86-4183　FAX　0997-86-4184

発行年月日　2014年3月28日

印　　刷　デザイン工房　スタジオ・ミスト
〒891-7101　鹿児島県大島郡徳之島町亀津7502-1
TEL　0997-82-1505

Archaeological Report

Boad of Education Isen town

Series №15

Omonawa Site Ⅱ

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
面　縄　貝　塚　群　Ⅱ
2014年3月
鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会